gくすくどんどん流

知能開発法



改訂版

松本敏史教育デザイン研究所

昨今、「幼児教育」とか「早期教育」という語を新聞や雑誌やテレビ等でよく見聞する。 しかし、これらの語は使う人によって相当違った意味で使われているようだ。中には、全 く誤った考え方を幼児教育という語に埋め込んで、世の若い父母や祖父母をまで惑わせて いる方々もいる。

いわゆる「お受験」に代表される「小学受験教育」の「知能指数」や「小学受験」などの言辞で宣伝されている「教育」のもつ弊害や行政の遅れを明らかにし、本来の幼児の教育はいかにあるべきかを伝えたい、ということが動機づけとなって、この本を書くことになった。

私は、全国でも屈指の大手進学塾で小学生も中学生も高校生も指導した経験がある。また、この塾で幼児教育部門創設に携わり、受験を中心にした幼児の教育を担当し、教材作りや実際の指導、講師の指導にも関わった経験がある。

また、ニューメディアと教育という関点で幼児用の教材(ハード、ソフト)の研究をし、 この分野の先進国アメリカに何回も訪問して、そのたびに日本の教育機器の劣悪さを再認 識して帰ってきた経験もある。

また、この3年ほどの間に、幼児の知能開発ワークブック「すくすくどんどん」(全30巻) や各種教具を企画開発し、全国の多くの方々に使用していただき好評を得ているという経験もある。

さらに、現在5歳6ヶ月の学ぶことが本当に好きな長男が0才の頃から一緒に学んできた(遊んできた)父親としての経験がある。

上記の様々な経験を反省しながら、これからの幼児教育のあるべき姿を特に家庭における教育を中心にして提案したいと思う。

なお、幼児の早期教育は、古い用語を使えば、いわゆる知育、徳育、体育がうまく、バランスされていなければならないことは言うまでもない。また、幼児教育学者には、体育、徳育、知育を優先順位としている人が多いと思う。その優先順位は、至極もっともであり、異論はない。

しかし、この本では知育に焦点を絞って考えたい。なぜなら知育は、体育、徳育にも増 して家庭、特に母親に負うところが大きいからである。

かつまた、幼児の知育に関する書物が数多く出版されているが、断片的な主張が多く、 諸説ふんぷんとしており、中には明らかに誤った考え方で世の母親たちを扇動したり当惑 させたりしているケースもあるからである。

知育に関する情報過多の状況にあって、では、具体的に自分の子にどうしてやればいいのか、迷っている人が多いからである。

今、両親たちは、一種の幼児教育情報過多症にかかっており、アイデンティティーを喪失しているように思われる人が数多くおられる。それゆえ、私はこの本で、多様な情報を

私なりに整理し、その上で実践的な幼児の知能開発をご提案したいと思う。

「幼い子どもに早期教育を行うなんて、本当に効果があるのだろうか。」 「子どもは、本当に楽しんで学習するのだろうか。」

生まれた時から様々な知的刺激を存分に受けて育った長男にとって、学ぶことは常にごく自然な楽しい遊びでありました。大人よりもはるかにすぐれた能力でいろいろなことを吸収していく長男の成長を見つめているうちに、私は早期教育のすばらしさをはっきりと確信するようになったのです。して、早期教育というのは、まさに親から子どもへの愛情の一つの表現の手段であると考えるようになったのです。

子どもを愛してやるということは、子育てでごく当たり前のことでありながら見失われ やすいことでもあります。早期教育の根本がその点にあるということに気づいた時、私は 母親として本当にうれしい思いでした。そして、長男の育児に関する情報を自分なりに整 理しながら、早期教育の実践方法をいろいろと模索することにしたのです。

私は幼児教育の先駆者である夫とともに、いろいろな教具や教材を集め実際に長男の学習に使ってみました。そしてその経験をベースに、この3年間、幼児用の知能開発教材「すくすくどんどん」や「かたちはかせ」等の教具の開発に携わってきました。「今まで世の中になかったけれども、子どもの成長に役立つこういうものがほしい」という母親としての願いを、少しずつでも自分たちの手で実現できたことに満足しています。

今年の春、夫が本を出すという話が初めてでた時、もしかすると共著になるかもしれないと思っていたら、案の定、私もここに登場することになりました。読者の父母の方々により近い存在として、この本で本音の早期教育論とその具体的な実践方法を論じさせていただきます。

「早期愛情教育のすすめ」 目次 -賢い両親のための幼児の知能開発法-

はじめに

第1章 早期教育ブームと3つの誤解

- ○小学受験教育は、本来の早期教育とは言えない 「お受検」ブーム 受験教育の実態 受験教育では本当に賢い子は育たない
- ○早期教育の目的は天才を作ることではない 知能指数で幼児の知能ははかれない 早期教育と天才
- ○幼児の教育に「まだ早すぎる」ということはない 『幼稚園では遅すぎる』(井深 大氏) 『子どもの知能は限りなく』(グレン・ドーマン博士)

第2章 早期愛情教育のすすめ

- ○早期愛情教育のめざすこと
- ○早期愛情教育のすすめ子育ての理想と現実早期愛情教育のすすめ
 - ①愛情の信頼関係をしっかりきずく
 - ②基本的な生活能力をしっかり身につけさせる

- ③新しいことをどんどん体験させる
- ④楽しく学ばせる
- ⑤ほめて、子どもの意欲をのばす
- ⑥親も学ぶ姿勢を見せる

第3章 今からできる知能開発法

- ○いつから始めるか
- ○幼児の知能開発の進め方
 - ①幼児の知能開発を行ううえで大切な心構え 子どもの能力を信じる/楽しく学習する/暖かく子どもを見守り、ほめてあげる /親も一緒に学ぶ
 - ②学習の進め方

大まかな学習計画をたてる

年齢別学習計画表

系統的な学習--体系化されたワークブックの活用

生活の中での体験学習の積み重ね

育児記録をつけて、学習計画の見直しを

○教材・教具の選び方・使い方

ワークブック教材・幼児教室など

- ①体系化されたワークブック
- ②幼児教室
- ③通信教育教材
- ④市販のワークブック類

おもちゃ・知育玩具・知能開発教具

- ①よいおもちゃを選ぶポイント
- ②知能開発に役立つおもちゃ 積み木/フラッシュカード/ジグソーパズル/図形パズル/ブロック/ カードゲーム・ボードゲーム
- ③コンピューター教材について

絵本

- ①絵本の力
- ②絵本の楽しみ方
- ③子どもの発達にあった絵本 6ヶ月~2才/1才~2才/2才~6才/4才~6才
- ④よい絵本を選ぶコツ

図鑑・事典

テレビ・ビデオ・CD・カセット

- ①視聴覚教材での学習の特徴
- ②視聴覚教材を利用する際に大切な心構え
- ③テレビ・ビデオ・CDおよびカセットの利用の仕方と教材の選び方 テレビ/ビデオ/CD・カセット

第1章 早期教育ブームと3つの誤解

○小学校受験教育は、本当の早期教育とは言えない

「お受験ブーム」

「いわゆる受験戦争を経験してきた偏差値世代とも呼ばれる両親は、自分の子どもに自分たちが経験してきた苦労をさせないためにエスカレーター式の私立学校に入れたがる。 小学受験ブームがわきおこっている」というような主旨の記事を新聞や雑誌でよくみかけます。

また「お受験」(小学入試受験)がテーマになったドラマが全国に放映されたりもしました。しかし、この「お受験ブーム」は本当にブームと呼べるのでしょうか。大都市およびその周辺に住む方々は「小学受験」というものが存在することはよくご存知でしょうが地方に行きますと上記のような記事は絵空事としか思えずちょっと理解に苦しみます。

実際、私立小学入試が行われているのは首都圏、近畿圏の大都市とその他数カ所にしか 過ぎません。その受験者数は全国の幼稚園児、保育園児の1パーセントにも満たないので す。マスコミは「コップの中の戦争」をあたかも全面戦争のごとくとらえて報道している としか思えません。先ほどの記事は「・・・都会の両親のごく一部には・・・入れたが る人たちもいます。」と改めるべきでしょう。

そして、その都会の「コップの中のお受験ブーム」も終えんを迎えつつあります。すで に大阪では、小学入試のための模擬テスト受験者の数が減ってきています。

大阪ではSという幼児の受験塾が毎年最大規模の模擬テストを行ってきましたが、昨年、受験者数が初めて1,000人を割りました。この種のテストでは3分の1から2分の1ぐらいのダミーを入れます(そうしないと、得点グラブが正規分布しない)ので実数は500人前後であろうと推測されます。大阪で最大手の模擬テストがこんな状況ですから、他は推して知るべしでしょう。子どもにいくつかの業者のテストをかけもち受験させる熱狂的な方々はせいぜい200ぐらいしかいらっしゃらないでしょう。大阪では既に「お受験ブーム」はピークアウトしたと考えられます。首都圏には、大阪に比して、エスカレータ式に大学まで行ける私立小学校が多いのですが、雑誌等での報道とはうらはらに、熱狂的ブームは去りつつあります。その大きな原因は次の3つです。

- ①幼児の絶対数が激減していること。
- ②小学入試はミズモノであることが親の方に認知されてきたこと。

特に、「知力テスト」だけで合否が決まるものではないということが常識になってきたこと。

③受験を目標としない本来の早期教育をめざす幼稚園や幼児教室が増えてきており、そのめざましい成果をあちこちで見かけるようになってきたこと。

幼児期だけガマンして苦労させておけば、高校入試や大学でラクができるという、いわゆる「先憂後楽」の発想は子どもの教育に関しては不適切であると言えます。

まともな早期教育を受けていれば、高校入試や大学入試で苦労することはないでしょう。 たとえ、そうでなくても、楽しく学ぶ機会を与えるべき幼児期に苦労させるより、中学生 や高校生になって苦労させるほうがよいのではないでしょうか。入試は制度ですから、時 と共に変遷します。10年後の私立大学なんて、大学側が逆にテストされ選択されるよう になるかもしれないのです。

楽しくない小学受験で苦労することによって学習の楽しさを知らずに幼児期を過ごすことは、その子の将来にとってプラスにはなりません。本当に大変な潜在能力を持っている幼児を小学入試という小さな柵の中に閉じこめてしまうのはよくないことだと思います。

受験教育の実態

2年ほど前であったか、NHK総合テレビで幼児教育がテーマの番組を見た。小学校受験の模擬テストの様子をルポしていた。小学入試のための幼児教室としては首都圏でNo. 1 したがって全国でもNo. 1 の「S」のテスト風景であった。

ペーパーテストはどこでも同じようなものを実施するので目新しくないからであろう、 番組ではいわゆる態度、行動力を点数化するテストに焦点を当てていた。

幼児を10人ほど1室に集めて、大きなダンボール紙とテープなどを与え、「とりい」を作らせていた。その共同作業を中年の女性教師が観察しておいて、ひとりひとりの幼児について、積極性・10点とか、協調性・5点とか点数化するようだ。その点数を他のテストの点数と合計して個人の得点を出し、偏差値を出し、入試の合格度判定を出すのである。その教師は「あの子はリーダーシップを発揮していたから何点で、別のあの子は協調性はあったけれどもちょっと積極的じゃなかったので、点数はこうである。」というように評価しておられた。

しかし、私はこの番組をビデオで何回か見直したが、私なら彼女が高い評価をあげた子をそんなにも評価しないなと思った。私はその子に、教師の評価を先取りして過剰適応しているような印象を持った。テストされていることを念頭において、評価するものの目を意識して行動しているようであった。別の子よりもすぐれているというより、よく教え込まれているという感じで、私は少し可愛想な気がした。

私がそのように思った子を、この女性教師は高く評価していた。第3の別の教師がいたらまた別の評価をしたかもしれない。

このような評価の基準があまりにも恣意的なテストの結果を点数化して、偏差値というわけのわからないものを出す。これは、幼児教育ではやってはいけないことだ。月齢の差を考慮していないことにも問題がある。大阪のある小学入試幼児教室では合格度判定をめぐって不幸な出来事があった。その幼児教室の模擬テストでは常にトップで「〇小学校合

格」と太鼓判を押されていた子が、実際には不合格になり、それが多くの母親に知れわたり、私のような部外者の耳にまで届いてきたのである。この教室は、この子にとりかえしのつかないことをしてしまったのではないか。

受験教育では本当に賢い子は育たない

受験塾は早期教育という観点からすると、全ど役に立たない。むしろ逆効果を生むこと のほうが多い。

受験塾は、最もその効能を発揮して「受験の役に立つ」という程度であって、それ以上 は期待できるものではない。

入学試験は合格させるためのテストではなく、不合格にするためのテストである。できるところを見つけほめるのではなく、できないところを指摘し、「だからキミはダメなんです」と宣告するためのテストである。

おとなも大かれ少なかれそうであるが、子どもは人に試されるのを嫌う。また、自分が 出来ないことを他人に指摘されるのを大いに嫌う。満5才の幼児が入試やその模擬テスト を喜んで受験するはずはないのである。

自ら積極的に楽しんで学習するときに子どもの能力は伸びるのであり、模擬テストを何 回受験したって子どもの能力は全ど伸びないと言ってよい。ある小手先のテクニックが身 につくだけである。

小学受験は、国立小、私立小を問わず、一応は文部省の学習指導要領を遵守する形で実施される。それゆえペーパーテストには、原則として文字や数字を扱う問いは出題されない。学習指導要領では、小学1年生になって初めて、「あいうえお」などの文字や「1, 2, 3, 4, 5」などの数字を学ぶことになっているからである。

従って、受験塾でもことばに関する問いをする時に文字は扱われないし、数の問いにも 原則として数字は出てこないのである。入試で出題されないからという理由で、文字や数 字を取り扱わないのである。

しかし、これは「ことばの学習」や「かずの学習」という関点からすると、たいへん扁った奇妙な学習をしていることになる。ことばの学習をする際にはひらがなは知っているほうが良いし、かずの学習をする際には、数字の $1\sim20$ ぐらいは読めて意味が分かっている方が良いに決まっている。そして実際には、年長児の大半はひらがなが読めるし、数字も $1\sim20$ ぐらいなら読めるし、18は17より大きいなどの意味も分かっている。

私立の幼稚園では夏休みに絵日記を書かせることが多いので、夏休みにはひらがなが読めるだけでなく書くことも出来るという幼児が相当数いるのである。

学習指導要領と現実の幼児の能力レベルには大きなギャップがある。指導要領の下で行われている小学入試のための受験塾は、入試制度という枠に縛られており、通ってくる子どもたちの学習を特殊な囲いの中に閉じこめて、たとえば系列完成などの問いを人より速

く正確に解答するような練習に終始しているのが現状である。

○早期教育の目的は天才を作ることではない

知能指数で幼児の知能ははかれない

最近の早期教育ブームの中、「この教材を使うと、幼児はみんな I Qが 1 4 0 以上の天才になります」というような広告を見かけますが、 I Q (知能指数) は、本当に幼児の知能を正確にはかることができるものなのでしょうか。

IQ(知能指数)は、フランスのビネーという人によって考案されたものです。IQの計算式は次のようなものです。

また、知能指数をはじき出す知能検査そのものについても、幼児の知能全体を測定するには限界があります。多数ある知能検査の内容がそれぞれの方式で異なっているのは、知能をはかる絶対的な検査法がないということを意味していますし、幼児の場合には特に、知能検査の際に実際の能力が発揮されているかという点では、誰しも疑問に感じるところです。

以上から、幼児の知能指数というものは、非常に限定された妥当性しかないものであることは明らかです。ですから、知能指数が150であるからといって、その子は天才だとは言えないのです。

アメリカのフィラデルフィアにある人間能力開発研究所の所長グレン・ドーマン博士は、「子どもの知能は限りなく」(サイマル出版)の中でこう述べています。

「知能テストの成績が良い人が高い知能を持っているとは限らない。また、知能テストの 成績の悪い人が必ずしも知能が低いというわけでもない。知能テストは知能を測定してい ない。何をするかで、知能が、そして天才が測られるのだ。」

彼は同じ本の中で、次のようにも述べています。

「幼児に知能はあるが、知能指数はない。」

「知能指数」が高くなるという字句を売り物にしている幼児教室や教材などというもの

は、頭から疑ってかかってよいでしょう。幼児の知能を指数化すること自体がほとんど無意味であるのに、それを売り物にしているのは、その教室なり教材の学問的背景がいかに 浅薄であるかを表明しているようなものです。

良心的な教室や良質の教材にとっては、至極迷惑な話です。

- ●幼児の知能を知能指数として示すことは、ほとんど意味がない。 年齢が低いほど、指数は過剰に表現される危険性がある 幼児の知能全体を知能検査で測定するには、限界がある
- ●知能指数が高くなるということを売り物にしている幼児教室や教材は、要注意。

早期教育と天才

「知能指数」とともに、早期教育ブームで安易に使われていることばが「天才」です。 先ほどの教材広告のように、「早期教育で天才になる」という主張をしているものがよくあ ります。ここでは本当に早期教育で天才を作ることができるのか、また早期教育の目的は 天才を作ることであるのか、この2点について考えてみましょう。

前述の通り、知能指数が150であるからといって、その人が天才だとは言えません。「天才」とは、広辞苑によると、「天性の才能。生まれつき備わった優れた才能。また、そういう才能を持っている人。」のことです。辞書的な意味での「天才」とは、「生まれつき」才能が「備わっている」人のことですから、その天才の才能は、決して早期教育で作られたものではありません。そして、早期教育の目的が天才を作ることであるとすれば、すでに生まれつき優れた才能をもっている人には早期教育は必要ないことになってしまうので、先の主張は矛盾していると言ってよいでしょう。例えば、赤ちゃんはみな生まれつき備わった優れた才能を持っていますから「天才」ですが、赤ちゃんに早期教育が必要ないなどと彼らは言うはずがないのです。

「天才」ということばは、「(優れた才能によって)世の中の多くの人々に認められる偉業を成し遂げた人」という意味でも使われています。例えば、エジソンやアインシュタイン、レオナルド・ダ・ビンチなどは、誰もが「天才」と認めるところです。では、果たして早期教育によってこのような天才を作ることができるのでしょうか。

エジソンは、非常に情熱的に努力を重ねた結果、万人に愛され尊敬されるような発明を成し遂げた「天才」です。彼は、「天才には、1%のインスピレーションと99%のパースピレーション (発汗=努力) が必要である」と言っています。世の中に広く認められる偉業を成し遂げるには、生まれながらの才能だけでなく、ものすごい努力が必要であるわけです。すぐれた才能というのは、ものすごい努力ができるということ自体を指していると言ってもよいかもしれません。確かに、早期教育を行うことによって、非常な努力家を作

ることはできると思います。しかし、そのような努力家の誰もが偉業を成し遂げるかというと、そうとは限らないのです。要するに、「天才」というのは、この意味では結果としての人物評価であるがゆえに、早期教育によって天才を作ることができるという可能性はあるものの、早期教育の目的にはなりえないということでしょう。

早期教育の目的は、すべての子どもに将来どのような課題にも対応できるような総合的な基礎能力(とくにブレイン・パワー)を開発することであり、「天才」を作ることではありません。

○幼児の教育に「まだ早すぎる」ということはない

『幼稚園では遅すぎる』(井深 大氏)

井深大(いぶかまさる)さんは世界的な企業ソニーの創立者ですが、早期教育の研究、 実践にもたいへん熱心な方です。1968年には財団法人幼児開発協会を設立、理事長に 就任されました。そして、1971年に有名な『幼稚園では遅すぎる』というドラスチッ クなタイトルの本を出されて、日本の早期教育ブームの火付け役になられたのです。以後、 早期教育に関するたくさんの本を書かれており、近著では"胎教"こそが早期教育の中で 最も重要だと主張しておられます。そして以前にも増して、早期教育の必要性を論じてお られます。

今では早期教育論の古典とも呼ぶべき『幼稚園では遅すぎる』は、第1章から第3章まで合わせて100項目の小テーマで書かれています。大いに興味あるテーマをいくつか拾い出してみましょう。

「第1章 幼児の可能性は、三歳までに決まってしまう」より

- ・幼稚園にはいってからでは、もう遅い
- ・幼児教育は天才をつくるためのものではない
- ・脳細胞の配線は、三歳までに決まる
- ・幼児は 'パターン認識' というすぐれた能力をもっている

「第2章 幼児の能力を最大限に伸ばす育て方・環境づくり」

- ・幼児の能力は、遺伝よりも、教育・環境が優先する
- ・「まだ早い」が幼児の成長をだいなしにすることがある
- ・幼児教育に、こうしなければいけないという定型はない
- 甘やかしすぎより悪いのは、放ったらかすことである。
- ・父親の"不干渉"は、子どもの素直な性格をゆがめる
- ・おじいちゃん、おばあちゃんの存在は、子どもにはよい"刺激剤"
- ・赤ん坊同士の交流は、社会性だけでなく知能の発達もうながす
- ・幼児は、叱るよりほめたほうがよい
- ・興味こそ、最良の意欲促進剤である
- ・幼児が強く興味を示したものには、好奇心を持続させる手助けを
- ・幼児は模倣することで、創造力を養っている
- 一つのことに秀でると、すべてに自信がつく
- ・鉛筆、クレヨンを持たせる時期は、早ければ早いほうがよい
- ・体を動かす子ほど、知能の発育も早くなる

- ・右手だけでなく、左手も鍛えたほうがよい
- ・幼児こそ、おおいに歩かせるべきである
- ・幼児には、遊びと仕事の区別はない
- ・幼児教育は、幼稚園・小学校のための予備校教育ではない

「第3章 ほんとうの幼児教育は、母親にしかできない」

- ・ビジョンをもたない母親に、子どもの教育はできない
- ・幼児教育は、母親教育から始まる
- ・子どもをりっぱな人間に育てられるのは、父親より母親である
- ・母親の自信のなさが、子どもをだめにする
- ・母親の虚栄心が、子どもにおかしなエリート意識をうえつける
- ・子どもを変えるには、まず親が変わることが必要
- ・親を超える人間に育ててこそ、はじめてほんとうの教育
- ・戦争や人種差別をなくせるのは、幼児しかいない

このような本を4半世紀も前にお書きになったというのは驚嘆に値します。この本は早期教育論者の基本テキストのひとつです。勿論、個々のテーマについて、井深さん自身も考え方を変えておられる場合もあるそうですし、脳生理学者の一部からは反対意見も出ています。

たとえば次のような意見です。

「脳細胞の配線が三歳までに決まるなんてウソです。三歳までの配線のでき方は、三歳以後に比べて急激ではありますが、三歳で決まってしまうとは言えません。それは育児の重要さを言うための殺し文句でしょう。」

たしかに、このテーマでは脳生理学者の意見の方が正しいのかもしれません。ただ、この本全体としては、現在でも充分に説得力があり早期教育に役立つ本です。ごく少数の方を除いてこの点に異論をもつ早期教育論者はいないのではないでしょうか。

『子どもの知能は限りなく』(グレン・ドーマン博士)

グレン・ドーマン(Glenn Doman)博士は米国に人間能力開発研究所を創設され、脳障害児の治療をしてこられました。

その実践を通して幼児の潜在能力の素晴らしさを発見され、幼児の能力開発のための独自のプログラムを創出されました。

そのプログラムはまた、健常児の早期知能開発にも大いに貢献しています。日本の早期

教育の実践家である、鈴木メソッドの鈴木鎮一さんや幼児開発協会の井深大さんとも親交をもたれ、日本の早期教育研究者や実践家にも多大な影響を与えておられます。

以下に、グレン・ドーマン博士が1984年に出版された(1988年にサイマル出版会より翻訳出版された)『子どもの知能は限りなく』という本の(幼児に関する)「130項目の"発見"」から、いくつか抜き出して幼児期の重要性を再確認しておきたいと思います。

井深さんもドーマン博士もよく似たお考えをお持ちですが、幼児の教育を始める時期は早ければ早いほどよいという点で見事に一致しています。筆者も全く同感なのですが、「その子にちょうどよい学習の環境をあたえてやることができれば」という条件をつけておいた方が良いと思います。

子どもたちについて-(1)

- ・幼児は食事よりも学習を好む。遊びよりもはるかに好む。
- ・幼児は何についても学びたがっており、今すぐ学びたいと思っている。
- ・大人は、子どもを愛している人ですら、大人のほうが子どもよりすべての点ですぐれて るという、非常に思い上がった考えをもっている。
- ・子どもは何よりも自分に注意を払ってくれる大人を求めている。
- ・赤ん坊は生まれた時から、学習が生き残るための技であると信じている。
- ・ありのままの事実(データ)を吸収する能力は、年齢に反比例する。
- ・一歳児に読み方(算数)を教える方が、7歳児に教えるより簡単である。
- ・強い好奇心は真の科学者すべてが持ち、すべての幼児も持っている特徴である。

子どもたちについて-②

- ・幼児は三歳までに、その後学ぶよりずっと多くの事実を事実として学ぶ。
- ・学校教育は六歳から開始される。学習は誕生と同時に始まる。
- ・子どもはすぐれた学び手である。与えられる教材やその与えられ方によってのみ、子ど もの学習が制限される。
- 人生の最初の6年は計り知れないほど貴重である。

知能について

・個人の遺伝的潜在能力は、両親や祖父母の能力によって限定されるものではない。(個人の遺伝的潜在能力は)人類の遺伝的潜在能力である。

- ・知能に大きな個人差があるのは、育った環境に大きな差異がある結果である。
- ・低い知能も高い知能も環境の産物である。 知あるいは無知という遺伝的特性など存在しない。

知能について-③

- ・事実は知能が形成される土台である。
- ・事実なしに知能は存在しない。
- ・(知能の第一の基本条件は、事実を吸収することである。)
- ・(知能の第二の基本条件は、)事実を貯える能力である。
- ・(知能の第三の基本条件は、) 貯えられた事実を役に立つ知識として引き出す能力である。
- ・(知能の第四の基本条件は、)事実や知識を使って、徐々に重要度の高くなる問題を解決する能力である。
- ・(知能の第五の基本条件は、)事実と知識を結び付け、並べ替えて、事実を支配する法則を見つけだす能力である。
- ・親は子どもに与える視覚、聴覚、触覚の刺激の量と種類により、また刺激を与える頻度、強度および持続時間を賢明に選ぶことにより、幼児が将来もつ天才の度合いを決定することになる。

脳について

- ・脳は使うことで成長する。
- ・脳の重要な成長は六歳までに完了する。
- ・われわれの人生では脳の千分の一も使いこなせない。
- ・人間の脳は125兆項目の情報(事実)を受け入れる容量を持つ。
- ・子どもの脳は、成長する機会を与えられるほど、どんどん成長する。

母親について

- ・世界で我が子のことをいちばんよく知っているのは母親、そして父親である。
- ・母親こそ最良の教師である。
- ・母と子のコンビが、学習には一番ダイナミックな組み合わせである。
- ・学習のプロセスは、母にとっても子にとっても楽しく親密なプロセスである。

方法について

・赤ちゃんの知能を何倍にもするための第一のステップは、たくさんのはっきりした事実を教えることである。

第2章 早期愛情教育のすすめ

○早期愛情教育のめざすこと

他人と比べて優秀になるとか競争に勝つとかが目標ではない。

本人が学ぶ楽しさを知り好奇心が旺盛になること。

豊かな感情表現ができ、他人とのコミニュケーションが上手でいきいきと生活し、人に 対して優しくなれること。

将来、人類や社会のために何か役立つ人間になることに情熱を燃やせるようになること。

早期教育を受けた結果として、いわゆる科学や芸術の天才となりうる場合もありますが、それはあくまでも結果であって目的ではありません。

先日、全幼連事務局長(全幼連については第4章で紹介)がこんなことを言われました。「早期教育を受けた結果、天才バイオリニストになったというようなことだけを強調しすぎるのは如何なものでしょうか。私は、早期教育を受けた子が青年になってアフリカでボランティアとして頑張っているというような話があってもよいのではないかと思うんです。」

私も全く同感です。

早期教育に望まれるのは、上記のような人間になるための基礎的な能力の総合的開発です。早期愛情教育がめざすのは、上述の目標をもつ早期教育を、母親が中心となって家庭で実践することです。幼稚園や幼児教室の先生による早期教育ではなく、わが子を愛する親が家庭で行う早期教育です。親にしかできない教育です。

子どもが生まれた時に、「すこやかに育ってほしい」「思いやりのあるやさしい子に育ってほしい」と願わない親は、おそらくいないでしょう。すやすや眠っている子どもの寝顔をながめながら、「この子のために、できるだけのことをしてやろう」と考えるのは、どの親も同じです。

ところが、何年かして子どもが大きくなってくると、「やさしい子」に育つはずのわが子は、親の言うこともろくに聞かずに、いたずらばかり。毎日毎日、ガミガミ叱ってばかりいる自分にいやけがさして、だんだん子どもがかわいくなくなってくる・・・・

このような「育児疲れ」の経験は、これもまた誰もが多かれ少なかれお持ちのことと思います。

「思いやりのあるやさしい子に」という子育ての理想は、現実にはなかなかむずかしいものなのでしょうか。

子育てに限らず、理想を実現するためには、それなりの手段を講じることが必要です。

私どもはこの本で、「やさしい子を育てる」という理想を実現するための1つの効果的な 手段として、両親の愛情に満ちた「早期教育」というものを提案してゆきたいと思います。

たとえば、子どもをのびのび育てるためには、ほめることが大切だということがよく言われます。けれども、毎日子どもと顔をつきあわせて、平凡な生活を繰り返している多くの母親にとっては、ほめてやる材料を見つけることは簡単ではありません。ほめてやりたいと思いながらも、やたら子どもの欠点が目について、子どもを叱ることが多くなりがちです。その結果、母親には子育てのストレスが蓄積し、叱られてばかりいる子どもの方は、意欲をなくして発達が阻害され、やさしい子にはほど遠い、わがままな子どもになってしまうという悪循環に陥ってしまうことになります。

これではせっかくの親心も、台無しです。

「ほめてやりたい」という親心を実際に行動にうつすためには、もっと積極的に親子で 共通の体験をすることが必要なのです。

両親が愛情を持って、親子のコミュニケーションを深める1つの手段として、教育活動をおこなうこと。それが私どもが提案している「早期愛情教育」に他なりません。

豊かな愛情に見守られながら、楽しく学ぶ機会を与えられた子どもは、自信を持っての びのびと新しいことに挑戦してゆきます。新しい刺激をどんどん吸収して、考える力を身 につけ、他人の気持ちを思いやることのできるやさしい子に成長してゆきます。

一方、教育活動を通して子どもをみつめる機会を持った親は、無限の子どもの可能性を 発見して、子育ての楽しさを感じながら、親自身も成長してゆくものです。

ではこれから、私どもの提案する「早期愛情教育」について、より具体的に説明してゆきましょう。

まず、子どもの発達に両親の愛情がどのような役割をはたすのか、考えてみましょう。 生まれてから6歳ぐらいまでの乳幼児期に、子どもは急激な発達を遂げます。しかし、 十分な愛情を受けずに育てられた場合には子どもの発達が非常に遅れるという事実は、「マ ターナル・ディプリベーション(母親剥奪)」として、よく知られています。

子どもが順調に成長してゆくためには、両親(または一定の保育者)の愛情が不可欠なのです。

生まれたばかりの赤ちゃんの場合を考えてみましょう。

赤ちゃんは、空腹や排泄などのさまざまな不快感を、泣くことによって表現しています。 この時期に一番大切なことは、母親が赤ちゃんからのサインをしっかりと受けとめて、赤 ちゃんが泣いたらすぐに、気持ちよくなるような状況にしてあげることです。

「泣いたら必ず応じてもらえる」、

これが親子の最初のコミュニケーションです。赤ちゃんは、この最初の信頼関係をもとに、少しずつ自分の外の世界への興味を広げていきます。 両親にしっかり受けとめられているという安心感が、これからの発達にとって非常に重要な「探求心」や「やる気」のもとになるのです。

一方この時期に、泣いても応じてもらえなかった赤ちゃんは、赤ちゃんなりに「泣いて も無駄だ」ということを学習し、無力感をいだくようになります。

さらに、子どもの成長していく過程においても、両親の愛情の果たす役割は非常に大き いと言うことができます。

子どもの脳は、新しい刺激を受けて回路を作りながら発達してゆきます。子どもがただ 待っているだけでは、発達に必要な十分な刺激を受けることはできません。そこに、両親 の働きかけが必要になるのです。

両親は、子どもにふさわしい新しい刺激を提供してあげることが必要です。けれども、ただ新しい物を子どもに与えるだけではいけません。まず親自らがいっしょになって遊んで、子どもに遊びを紹介してあげることが大切です。その中で、子どもも自分で新しい刺激を体験できるようになります。子どもの挑戦を見守り、はげまし、ほめてあげるのもまた、両親の役割です。

両親の愛情によって、子どもの発達に必要な新しい刺激を体験できる暖かい「場」を提供することが、初めて可能になるわけです。

このように、生まれた直後から、両親の愛情は子どもの発達の基盤になっていると言えます。

そこで、私どもが「早期愛情教育」としてみなさんに提案するのは、

- ①愛情の信頼関係をしっかり築くこと
- ②積極的に、新しい刺激を親子で一緒に体験することという2点です。

「早期教育」といっても、何も特別なことではないのです。子育てでごく当たり前のことを、なおざりにせずしっかりと行うことがすなわち、「早期愛情教育」であると言ってもよいでしょう。早期愛情教育は、幼児教育の専門家が行うのではありません。子どもを一番愛していて、子どもを一番理解している両親が実践してこそ、意味のあるものなのです。 ①愛情の信頼関係をしっかり築くこと

親子関係で最も大切なことは、子どもに「自分は愛されている」と感じさせてあげることです。先にご紹介した、泣いている赤ちゃんへの応答もその一つの方法です。

肌と肌をふれあうスキンシップも、とても大切なことです。赤ちゃんの頃から、機会あるごとに、子どもにほほえみかけながら抱きしめてあげて下さい。

また、時には「おかあさんは、○○ちゃんが大好きよ。」

と、言葉にして伝えてあげるのもよいかと思います。

幼い頃に十分に愛情を注いであげることが、ひいては将来、子どもの自立をうながすこと につながっていくものです。子どもが満足できるように、存分に甘えさせてあげて下さい。

これは、おかあさんだけでなく、おとうさんにもぜひ実践していただきたいことです。 両親の豊かな愛情を感じながら育った子どもは、明るく、自信にあふれて、のびのびと行動できます。

親子の間に、愛情の信頼関係を築くことが、教育の根本です。

②積極的に、新しい刺激を親子で一緒に体験すること

子どものよりよい発達を促す為には、それぞれの発達段階に応じた新しい刺激を提供 してあげることが必要です。

「発達段階に応じた」刺激というのは、子どもがすでに到達したものよりもほんの少し難しい課題を意味します。子どもが少し努力すればできるようなものでなければなりません。あまりむずかしすぎると、子どもはすぐにいやになってしまうからです。

与える刺激は、「新しい」ものでなければなりません。同じ刺激ばかりだと、子どもは すぐにあきてしまいます。子どもの旺盛なる好奇心を、満たしてやるものが必要なのです。

ここでいう「刺激」とは、時には「おもちゃ」であったり、「手遊び」であったり、「絵本」であったり、お話しながらの「散歩」であったりします。

親が見守る中で、新しい刺激が子どもの目の前にあらわれた時、子どもが最初からそれに興味を示すかどうかは、いろいろです。けれども、親がおもしろそうに遊びを先導してやれば、子どもは必ず自分でもやろうとするものです。

新しい刺激に挑戦することは、子どもにとっては、わくわくする楽しい体験です。それが子どもにとって適切なレベルの課題であれば、子どもは少しずつ頑張ることを学習し、それによって「やった」「できた」という小さな成功体験を持つことができます。

おもちゃを使った「遊び」も、カードを使った「学習」も、それが子どもにとって楽しい刺激であれば、子どもは喜んでやるものです。大人が考えるような、「遊び」と「学習」の区別など、子どもにはありません。楽しければどんどんやる、楽しくなければやらない。これが、子どもの正直な行動原理です。

親が子どもに与える刺激を選ぶ場合に失敗しない方法は、子どもが好きなものを系統だてて深めてゆくことです。苦手なことを無理してやらせるよりは、好きなもの・得意なことをどんどんやらせてゆくとよいでしょう。好きなことをして小さな成功体験を重ねる中で、子どもは自然に無理なく、集中力や持続力を身につけてゆきます。幼児期に集中力や持続力を身につけた子どもは、就学期になるとぐんぐんのびてゆくことができます。

親は、子どもに刺激を与えっぱなしにしてはいけません。子どもと同じ目の高さで、 親も一緒に体験することが大切です。

おとうさんもおかあさんも童心にかえって、子どもと一緒になって、いろいろなこと に再挑戦していただきたいと思います。

絵本のすきなおかあさんなら、自分が子どもの頃に好きだった絵本にもう一度出会って、感動なさることでしょう。また、いろいろな新しいすてきな絵本に出会って、子ども以上にわくわくされるかもしれません。

このように、おかあさん自身が感動している姿は、子どもにとっては非常に印象深い ものです。

「絵本を読みなさい」

と何度も言うよりも、おかあさんが楽しそうに絵本を読んでいる姿を見せるほうが、子 どもを絵本好きにするのに効果があります。

子どもと一緒になって学ぶ姿勢を持つことで、親は、子どもの成功体験をいっしょになって喜んでやれるものです。そして、子どもの能力のすばらしさに感動し、子どもを一人の人間として尊敬する気持ちも生まれてきます。

子どもは親の所有物ではありません。少し距離をおいて、独立した人格を認めてあげることも親子関係では必要なことです。

子どもは、新しい刺激に対応することが上手です。一度、子どもの遊びにおとうさん・おかあさんも参加して、競争してみてはいかがでしょうか。記憶力などでは、子どもの能力がだんぜんすぐれていることを、親としてうれしい気持ちで、正直に認めてあげて下さい。子どもがどんなにうれしそうに得意な顔をするか、楽しみですね。

⑤ほめて、子どもの意欲をのばす

新しいことを自分でできた時、子どもは自分の小さな成功体験に大きな喜びを覚え、そのあふれんばかりの喜びを他の誰かに伝えようとするものです。

親は、この子どもの気持ちをしっかり受けとめてあげることが大切です。

「やったね」「すごいね」「よくがんばったね」

と、暖かいことばをかけて、子どもの成功を一緒になって喜んであげて下さい。大好きな 親からほめられると、子どもはますますうれしそうな顔をするのを見のがしてはなりませ ん。

ほめることは、子どもの意欲をのばすためにとても効果のある手段です。またほめても らいたいたくて、子どもは新たなことに挑戦してゆきます。

よくできる子どもはたいてい、親にほめられて育っています。ほめられるからよくできる、よくできるからまたほめられる、ほめられるからまたよくできるようになる、というような好循環が成り立っているのです。

ほめられるということは、自分の価値を認めてもらうことにほかなりません。

「よくがんばったね」という賞賛の言葉には、「○○ちゃんが大好きよ」という意味もこめられているのです。

ほめられることによって、子どもは少しずつ自分に自信をもてるようにもなります。それが、新しいことに挑戦してゆく意欲や勇気を生むのです。

親が子どもをほめてやるためには、子どもをしっかり見つめることが必要です。「ほめる」ということは、子どもにお世辞を言うことではありません。親は、子どもの成長をたしかに認めた時にはじめて、子どもをほめてやることができます。

「ほめる」という言葉には、もともと「祝う」という意味があったそうです。子どもを ほめてやるということは、子どもの成長を祝うことでもあると思います。子どものすばら しさを認めて、それを子どもに伝えてあげること、そして、親が一緒になって子どもの成 長を喜んであげること。親が子どもを「ほめる」ということは、そのような奥深い愛情の コミュニケーションではないでしょうか。

子どもをほめてやれる親は、親自身も幸せだと思います。子どもの成長をたしかなもの に感じることは、親にとってもたいそううれしいことだからです。

子育ての楽しさは、子どものすばらしさをどれだけ親が感じとることができるかによって、決まるような気がいたします。

親は、子どもの遊びや学習に、できるだけ一緒に参加してあげることが大切です。一緒に遊ぶことや一緒に学習することが、親子のふれあいを広げ、子どもを見つめる機会を作ります。

いくらほめてやりたくても、ほめる材料、言い替えれば子どもを見つめる機会がなけれ

ば、ほめてやることはできません。

子どもに新しいことを体験させる機会をどんどん作ってあげて、一緒にやってみて下さい。

親も一緒に何かをやってみると必ず、子どもの能力のすばらしさを見つけて感動することでしょう。そして、子どもの無限の可能性を実感するようになるものです。 親にとって、これほどうれしいことはありません。

- ●ほめられると、子どもは自分に自信を持てるようになる
- ●子どもをしっかり見つめて、ほめてあげることが大切
- ●ほめることは、親の子育ても楽しいものにする
- ●親も子どもと一緒に体験することで、子どものすばらしさを発見できる

⑥親も学ぶ姿勢を見せる

親が子どもと一緒に遊んだり学習したりする機会を持つと、子どもの成長を見いだせる ということの他にも、すてきなことがあります。それは、親自身も新たなことを学べると いうことです。

子どもと一緒に図鑑やビデオを見ていると、忘れていたことを思い出したり、今まで知らなかったことに気づいたりして、親のほうもずいぶん物知りになります。新しいことを覚えるのは、子どもにはかなわないことが多いものですが、子どもの持つ好奇心に刺激されて、親もけっこう、新たな知識を吸収しているものです。

子どもに絵本を読み聞かせる場合でも、読んでいる親自身がわくわくしたり楽しくなったりした経験が、きっとどなたにもあることでしょう。

学ぶということは、子どもに限らず、親にとってもやはり楽しい体験であるわけです。

子育ては、親が自分を犠牲にして子どもだけを育てることではありません。親も子どもと一緒に楽しみながら学んで、共に成長してゆくべきだと思います。

子どもと一緒に体験するということで作った機会を、親自身も、大いに利用してみましょう。親が学ぶことを楽しんでいる姿は、子どもの目にはとても新鮮で、キラキラ輝いて見えることでしょう。

子どもは、親がしていることをまねるものです。「学ぶ」ということばは、「まねぶ」すなわち「まねをする」ということからきています。子どもは、親自らが学ぼうとしている姿をまねながら、新しいことを学ぶ楽しさを自然に自分のものにしてゆきます。

子どもに何百回、本を読めというよりも、子どもの前で親が本を読んでいる姿を見せる

ほうが、子どもを読書好きにするにはよほど効果があるのです。

本来人間というものは、この世に生を受けてから死に至るまで、日々新たに学ぶことがあるはずです。

子育てを通して、子どものすばらしさに感動したり、親としての生き方を考えたりする ことも、すべて人生における学習です。

自分を謙虚に見つめて生きている親の姿を見せることが、何にもまさる教育ではないでしょうか。

- ●子どもと一緒に、親自身も学ぶことを楽しむ
- ●子どもは、学んでいる親の姿のまねをしながら、学んでいく
- ●人生は、日々の新たな学習の連続である

第3章 今からできる知能開発法

○いつから始めるか

「人間は生まれた時はみな同じで、生まれつきの天才や劣等性などはこの世に存在しない。 しかし、生まれてから三歳ぐらいまでのあいだに人間の能力や性格がほとんど決まってしまう。問題は0歳から三歳ごろまでの育て方であり、幼稚園に入ってからでは遅すぎるのだ。」(――線筆者)

これは井深 大さんが『幼稚園では遅すぎる』の中で述べておられることですが、―― ―線部に関しては最近の脳生理学者で異論を唱える人もいらっしゃいます。

また、ドーマン博士は次のように述べています。

「六歳になる前だったら、赤ん坊を天才にするのは簡単である。六歳を過ぎてしまうと、 天才に育てるのは非常に困難だ。」

しかし、早期教育の目的は天才を作ることではありません。また、早期教育を受けたからと言って天才になれるかどうかわかりません。これは第一章でも述べた通りです。

さて、「幼児の知能開発はいつから始めるべきでしょうか?」

私の答えは次の通りです。

「知能開発を始める時期について、早すぎるということはないでしょう。また、わが子を天才にしようと思うのでなければ、遅すぎるということもないでしょう。ただ、ちょうどよい学習環境を与えてあげることができるのであれば、それは早ければ早いほど効果的でしょう。」

学習は誕生と同時に(あるいは胎児のある時期から)始まり、死ぬまで続きます。また、 意図的な学習を始めるのに遅すぎるということはありません。ただ、幼児の頃からちょう どよい学習環境を与えられて、楽しく学んできた子と何もしなかった子とでは成長するに 連れて大きな差が生まれてくるのも事実です。

みなさんにも心当たりがありませんか。みなさんが中学生や高校生の時に、「日頃、ほとんど勉強らしい勉強もしていないのにテストの前にちょっと勉強すればよい成績を取る人」がいませんでしたか?クラスに1人ぐらいそういう人がいるものです。いわゆる頭のよい子(すぐに理解する、すぐに覚える、そして忘れない)です。

筆者は大手の進学塾で、小6生も中3生も指導した経験がありますが、「この子たちも適切な早期教育を受けていればこんなに苦労することはなかっただろうに」と思うことが再三ありました。小6生、中3生に学習のテクニックを身につけさせることはできます。学業成績のよい子、入試に合格できるような子にはなんとか指導できるでしょう。しかし、「頭のよい子」になるように指導するのは困難です。

本人も思わず知らず早期教育を受けていた子がたまにいて中学2年生までは学業成績は それほどでもなかったけれど、中3の2学期からクラブ活動もやめて勉強に専念すると急 に成績が伸びるという子が、例年数人はおりました。今から考えると、彼らは一様に国語の力があったと思います。恐らく、幼い時にお母さんやおばあさんから、お話を読み聞かせてもらったり、好きな絵本を読ませてもらえる環境の下に育てられた子たちではないでしょうか。

- ●幼児の知能開発に、早すぎるということはない。
- ●幼児の知能開発に、遅すぎるということはない。
- ●できるなら早く始める方が効果的といえる。

①幼児の知能開発を行ううえで大切な心構え

第2章では早期教育のあり方についてご説明いたしましたが、この章では、早期教育の うちの知能開発を実際に行う際の具体的なアドバイスを、ご紹介していきたいと思います。

(早期教育において、心と体と知能の教育をバランスよく行うことが大切であることは、 先に述べた通りです。この本では、筆者が知能開発教材の制作に携わってきた立場から、 知能開発を中心に早期教育の行い方をご紹介しております。みなさまに知能開発について 十分ご理解いただくために、先に述べた内容も含めながらご説明させていただきます。)

最初に、幼児に知能開発を行ううえで大切な心構えを、具体的にまとめておきましょう。

<子どもの能力を信じる>

まず大切なのは、子どもの無限の能力を信じて、親が愛情を持って知能開発を始めることです。

子どもは無限の能力を秘めていること、それを引き出すには乳幼児期の働きかけが最適なこと、親が愛情を持って教えることが一番教育効果があがること。

これら3つのことを、教える立場の親の方が、まず十分理解していただきたいと思います。おそらく多くの方が、初めは知能開発に関して半信半疑でおられることでしょう。けれども、赤ちゃんは話し始める前からことばを理解していると信じて、子どもは誰でも新しいことを学びたがっていると信じて、知能開発を始めてみることが大切なのです。

「子どもは理解しているはずだ」と信じることから、教えることに対する自信も生まれてきます。

子どもの無限の能力を信じて、知能開発を始めましょう。

<楽しく学習する>

実際に知能開発を行う時に大切なことは、子どもがいつも楽しく学習できるように、配慮してあげることです。子どもにとっては、学習も一つの遊びだと言えます。楽しくなければ、決してやろうとはしません。

学習する時には、親は笑顔で楽しい雰囲気を作ってあげましょう。子どもの機嫌がよい 時を選んで学習し、機嫌が悪い時には無理強いしてはいけません。

子どもには、すでにできることよりもほんの少し難しい課題に取り組ませるようにしましょう。常に新しい刺激を与えるようにして、覚えてしまった情報は、さっさと片づけてしまいましょう。

子どもが好きなことをどんどんやらせましょう。苦手なことを無理してやらせる必要は ありません。

学習は、テンポよくスピーディに行いましょう。リズムをつけたり、ゲーム化するなど

の工夫をすると、学習を楽しく行えます。

子どもがいやがるまで続けずに、早めに学習を切り上げましょう。

子どもを退屈させないで、学習意欲を次の機会へつないでいくことが、楽しく学習させるコツです。

<暖かく子どもを見守り、ほめてあげる>

さらに大切なことは、親が子どもが学習をしている姿を暖かく見守って、成果を一緒に 喜んであげることです。

親は子どもが学習する機会を作ってあげるだけでなく、子どもと一緒に学習に参加して、 子どもが学習している姿を暖かく見守ってあげて下さい。子どもは親の愛情を感じながら、 自信をもって学習に挑戦することができます。

子どもが新しいことを学んだ時には、一緒になってその成果を喜んであげましょう。

ほめることは、子どもにお世辞を言うことではなく、子どもの成長を祝ってやることです。ほめられることによって、子どもは少しずつ自分に自信を持てるようになり、新しいことに挑戦していく意欲や勇気を育てていきます。ほめることは、子どもの意欲をのばすためにとても大切なことです。

ここで、注意しなければいけないことが1つあります。それは、子どもが取り組んでいることをできなかった時の親の対応のしかたです。

子どもがうまくできなくても、叱ったり、失望したりしてはいけません。「できたら、ほめる」ということの反対は、「できなかったら、叱る」ではないのです。

結果としてはうまくいかなくても、子どもが精一杯力をつくしたというその過程を、親は評価してあげるべきです。うまくできなかったという結果については、子ども自身が一番よく受けとめています。くやしくって悲しい思いをしている当事者の子どもを、親は暖かく包み込んでやる配慮が必要です。

「できなくて残念だったね」と子どもをなぐさめ、「でも、○○ちゃんはよくがんばったね」

と子どもの努力をたたえ、「また、今度やってみようね」とはげましてやることが大切だと 思います。

このような観点から考えると、幼い子どもにテストをするということは、感じやすい子 どもの心を傷つける大きな危険性をはらんでいると言えるでしょう。

学習する過程において、子どもが実際にどれくらい理解しているかを確かめることは、 ある程度必要であるとは思います。しかし理解度の確認をするには、親側に十分な配慮が 必要です。

日頃の学習においては、改まった「テスト」はする必要はありません。ゲームのように 軽く楽しい気分で、理解度の確認をして下さい。 幼児教室などで改まったテストを受ける場合にも、むやみに子どもを緊張させるのはよくありません。いつもと同じように楽しい気分で学習に望ませるようにして下さい。また、テストの結果については、あくまでも「これだけできた」ということを重要視して評価してあげることが大切です。テストは、できない点をさがすためのものではなく、子どものよい点を客観的に評価するものだとお考え下さい。

親がテストの点数に一喜一憂していると、子どもは、親の顔色をうかがいながら行動するようになってしまいます。

ほめることは非常に難しいことでもありますが、子どもを信じてやるという気持ちを忘れさえしなければ、ほめて子どもをダメにするという心配はありません。

<親も一緒に学ぶ>

子どもに学ぶ楽しさを感じとらせるためには、親自身も、学ぶ姿勢を持つことが大切です。

子どもと一緒にいろいろなことを体験して、今まで気づかなかったことに気づく楽しさ、 知らなかったことを知った喜びを、親も親のレベルで、実際に感じていただきたいと思い ます。

子どもは、親が「こうしなさい」と言ったことよりも、親がいつもしていることをまねるものです。

人生は、学習の連続です。親自身も知的好奇心を失わずに、子どもと一緒に楽しく学ぶ 機会を持つことが大切です。

- ●子どもの無限の能力を信じて、親が愛情を持って知能開発を始める
- ●子どもが楽しく学習できるように、配慮する

子どもが機嫌のよい時に、楽しい雰囲気で

できることより少し難しい課題に取り組ませ、常に新しい刺激を与える

好きなことをどんどんやらせる

学習はテンポよくスピーディに

子どもがいやがる前に早めに学習を切り上げる

●子どもを暖かく見守り、成果をほめてあげる

うまくできなかった時にも、子どもの努力をほめてはげましてあげる

テストは子どものよい点を客観的に評価するためのもの

②学習の進め方

これから家庭で実際に知能開発を行う場合、学習はどのように進めていけばよいでしょうか。

最初に、大まかな学習計画をたてることが必要です。子どもの年齢や発達段階にあわせて、学習する内容を決め、内容にあわせた教材・教具を準備して下さい。学習計画に基づいて、系統的に教材・教具を使った学習を進めましょう。系統化された学習をご家庭で効率よく行うには、体系化されたワークブックや幼児教室を利用するとよいでしょう。

また一方では、遊びや生活の中で実際にいろいろな体験をさせ、子どもの興味を大切に のばしていくような具体的な学習も進めていきましょう。

学習した内容は記録にとり、次の学習をどう進めるかを考える資料にしましょう。記録 することで子どもの成長がよくわかり、断片的な学習を系統的にとらえる機会にもなりま す。

<大まかな学習計画をたてる>

知能開発をすすめる上で、一番基礎になるのが学習計画です。いきあたりばったりに学習を始めるのではなくて、子どもの年齢や発達段階にあわせて、どのような内容について、どんな教材・教具を使った学習をするかを、大まかに決めておくことが大切です。

知能開発には、「言語」「数量」「図形」「記憶」「常識」「巧ち性」の6つの領域の学習が必要です。これらの領域において、小学校入学前までにどのような学習をすればよいか、ご説明しておきましょう。

「言語」の学習は、これらすべての中でも最も大切なものです。ことばは、私たちのコミュニケーションの手段であり、思考する道具でもあります。幼児期の知能開発は、何よりも言語能力をしつかり養うことを中心として考えることが必要です。

身近な事物の名前を知ることから始めて、抽象的なことばを理解することまで、語彙力をつけることが大切です。

文字については、ひらがなを一通り読めること、自分の名前をひらがなで書けること、 の2つを就学前までにできるようにしたいものです。子どもの文字への興味を大切にしな がら、学習を進めて下さい。

「数量」の学習は、同じものを仲間としてとらえることから始めます。ものと数字とを 1対1対応させながら、多さを抽象的に表している「数」の意味を理解させることが大切 です。

就学前には、30くらいまで数唱ができることと、具体的なものを使って、10くらいまで数を数えたり、多さを比べたり、足したりひいたりすることができるようにしましょう。

「図形」の学習は、同じ形を見つけたり、空間での位置関係を考えたりというような問題を通して、認識力や推理力を養うものです。言語や数量の領域の学習が主に左脳中心であるのに対して、図形の学習は、右脳を活性化させるものです。幼児期には、積み木やパズルなどを使って、自分で実際にいろいろな形を作って遊ぶ体験をたくさんさせることが大切です。

子どもがイメージする力とともに、いろいろな角度からものごとを考える力のもとを育てます。

「記憶」の学習は、ものごとを連続的に理解するためには欠かせないものです。短いお話を記憶したり絵を短時間に記憶する練習をすることによって、集中力を養うこともできます。

「常識」の学習は、自然や社会のいろいろなものごとについて、子どもに興味をもって ふれさせてゆくものです。身近な動植物を観察したり世話をしたりしながら、子どもはい のちの神秘さに気づいていきます。季節の変化や気象現象に関心を持つことで、自然の偉大な力を感じとっていきます。世の中にあるいろいろな人々の仕事について理解することで、感謝の気持ちもめばえてきます。常識の学習は、単に知識を得ることだけでなく、子どもの心を感性豊かに育てるためにも大切なものです。

「巧ち性」の学習は、手先を使う学習です。はさみを使って切ること、のりではること、紙を折ることの他、鉛筆で線や文字をかく練習も含まれています。手先を使う機会をたくさん持つと、脳が刺激されて能力の発達が促されます。就学前までに、はさみを正しく使い、鉛筆で自分の名前をかけるように練習させましょう。

以上が、小学校入学までの知能開発の各領域の学習内容の概要です。

学習計画は、これらの内容を領域ごとに、年齢や発達段階にあわせて段階的に配列し、 学習する内容に応じた教材・教具でどのような学習活動を行うかを具体的に決めたもので す。

- ●知能開発を行うには、どんな内容をいつ学習するか、大まかに学習計画をたてることが必要
- ●学習計画は、

言語・数量・図形・記憶・常識・巧ち性の6つの領域ごとに、 就学前までに学習する内容を年齢別に分け、

どんな教材・教具を使った学習活動をするか具体的に。

<年齢別学習計画表>

ではここで、学習計画の一例として、教育デザイン研究所の「年齢別・学習計画表」をご紹介しておきましょう。

年齢別学習計画表

	2~3歳児	3~4歳児	4~5歳児
늴	■語彙をふやす■ことば遊び(同頭語)■ひらがなを一文字ずつ読む■身近な漢字を知る	■ことば遊び(同頭語、同尾語、しりとり)■ひらがなのことばを読む■反対類推ができる	■ことば遊び(同頭語、同尾語、しりとり)■ひらがなの文を読む■カタカナのことばを読む
語	○絵カード、ひらがなカード、漢字カード○ひらがなの表○物語絵本○カルタ	○絵カード、ひらがなカード、漢字カード○ひらがなの表○物語絵本○カルタ	○絵カード、ひらがなカード、漢字カード○ひらがなの表○物語絵本○カルタ○カタカナの表
知識	■良いこと、悪いことの判断ができる■からだの部分の名前がわかる■身近なものの用途がわかる	■月、日、曜日、時刻に興味をもつ■季節を理解する■世の中の色々な仕事に興味をもつ	■仲間分けができる■身近な虫、花などの特徴や成長の様子を理解する■風や影などで、気象現象に興味をもつ
日时人	○図鑑○ビデオ	○カレンダー、時計○図鑑○ビデオ	○図鑑○ビデオ

	2~3歳児	3~4歳児	4~5歳児
	■同じ形、絵柄を見つける	■違いを見つける	■違いを見つける
	■形を合わせる	■形を合わせる	■形を合わせる
図	■位置関係を理解する	■位置関係を理解する	■位置関係を理解する
		■対象図形を理解する	■対象図形を理解する
			■空間での位置関係(重なり、回転)の理解
形			
	○図形パズル	○図形パズル	○図形パズル
	○絵あわせカード	○ジグソーパズル	○ジグソーパズル
	○積み木	○トランプ	○トランプ
	○ブロック	○鏡、折り紙	○鏡、折り紙
		○ブロック	○ブロック
	■ものの数を数える	■ものの数を数える(20まで)	■ものの数を数える(20まで)
数	■大小、多少、高低、長短、重軽	■数唱(100まで)	■数唱(100まで)
	広狭の比較	■大小、多少、高低、長短、重軽	■大小、多少、高低、長短、重軽
		広狭の比較	広狭の比較
量		■ものを使ってたし算、ひき算をする	■ものを使ってたし算、ひき算をする
			■ものを同じ数ずつ分ける
	○数字の表	 ○数字の表	○数字の表
	○すごろく ○ ド - パォ - ド	○すごろく ○ じっツカード	○すごろく ○ 15 × 17 ★ 15
	○ドッツカード ○よいなただ	○ドッツカード ○ トンパット #*	○ドッツカード ○ ト シ ン ト グた
	○おはじき等	○おはじき等	○おはじき等

<系統的な学習--体系化されたワークブックの活用>

学習計画ができたら、計画に基づいて系統的な学習を始めましょう。

毎日それぞれの領域の学習を全部やらなければいけないということではありません。一週間とか一ヶ月とかいった期間をひとまとまりにして、その間に各領域で計画していた学習を行うとよいでしょう。

ここまで読んでこられた方の多くは、おそらく、

「知能開発って、実際にやるとなったら大変だなあ。」

と感じられたに違いありません。学習計画をたてるには、親がいろいろな知識を持っていなければむずかしそうだし、系統的に学習を進めるといっても、毎日きちんとやれるかどうか気になるところです。

そこで、系統的な学習をご家庭でもっと気軽に効率よく行う方法をご紹介しておきましょう。それは、体系化されたワークブック教材を利用したり、そのような教材を使って授業を行っている幼児教室に通ったりすることです。

体系的に編集されたワークブックや幼児教室では、専門家により作られた学習計画に基づいて系統的な学習が用意されています。

体系的なワークブックや幼児教室で少しずつ学習していくことによって、知能開発に必要な各領域の学習内容に、まんべんなく出会う機会を持つことができます。

後で具体的に述べますが、これらのワークブックや幼児教室での学習というものは、そこでその学習内容をすべて習得しなければならないというたぐいのものではありません。 そこでの学習を一つのきっかけとして子どもの興味を広げていったり、それまでに実際に経験して得た知識を整理したりまとめたりするのに活用すべきものなのです。

ワークブックを少しずつ学習したり、定期的に幼児教室に通うということなら、親にとっても子どもにとっても、楽しく学習を続けやすいものです。ですから、これらをうまく利用して学習の基本的なペースを作りながら、系統的に幅広く学習をすすめていくとよいでしょう。

系統的な学習には、体系化されたワークブックや幼児教室をうまく利用するとよい「すくすくどんどん」や「すくすくどんどん新作電子版」がお薦めです。

<生活の中での体験学習の積み重ね>

ワークブックなどによる系統的な学習を進める一方で、幼児期の知能開発には、遊びや 生活の中で実際に体験しながら学習することが欠かせません。親は、日頃の生活や遊びの 中で子どもがいろいろなことがらに目を向けていけるように、意識して働きかけてあげる ことが必要です。 そして、子どもが興味を持ち始めたことをより深めていく学習の機会を、積極的に作って あげることが大切です。

生活の中でどんな働きかけをすればよいか、言語・数量・図形・記憶・常識・巧ち性の 6 領域での例を少しずつご紹介しておきましょう。

「言語」

電車に乗って出かけた時、文字に興味を持ち始めた子どもには、駅の名前を指さして読んであげると、非常に印象に残るものです。さらに家に帰ってから、同じ文字を紙に書いて見せてあげたり、カードや本で一緒にその文字を確認してあげたりすると、子どもは喜んですぐに文字を覚えてしまいます。

「数量」

おやつの時間には、数量の学習をやってみましょう。ビスケットの袋をあけたら、その中から「2枚」とか「3枚」とか枚数を決めて、子どもに自分でビスケットを取らせましょう。何人かで一緒に食べる時には、みんなの分を配らせてもよいでしょう。子どもは食べ物の「多い」「少ない」の問題には、非常に真剣になるものです。おやつの時間に、少しずつ子どもの数量感覚を養う機会を作ってあげましょう。

「図形」

積み木やブロック・パズルなどで好きなものを作って、大いに遊ばせましょう。

「記憶」

幼稚園でのできごと、友達と遊んだことなどについて、子どもに質問をして答えさせま しょう。また、一緒に出かけた日には、「きょうは、こんなことがあったね」と子どもと一 緒に話し合いをしましょう。

日頃から、親子の暖かい会話を大切に心がけることが大切です。

「きょうはどんなことをしたのか、帰ったらおかあさんに教えてね」

と声をかけておくと、子どもは一生懸命、楽しかったことを親に話してくれるものです。 子どもの話をうまく引き出してあげるような「よい聞き手」になってあげて下さい。話す ことがきっかけになって、子どもはいろいろなできごとを印象深く記憶にとどめるように なります。

「常識」

戸外に散歩に出かけた時には、道ばたの草花や虫たちに目をとめて、子どもと一緒に観察して下さい。目でみて、耳で聞いて、手でふれて、においをかいで・・・五感をフルに使って、子どもと一緒に自然を感じとってみることです。後で図鑑などを使って、名前や

生態を調べてみましょう。自分でじかに感じとったイメージがいきいきとよみがえり、子どもにとって生きた知識となることでしょう。

「あれは、なに?」「どうしてそうなるの?」といった子どもの疑問を、大切に受けとめてやることも大切です。親も一緒になって、図鑑などで調べてあげて下さい。

「巧ち性」

折り紙や画用紙を使って、子どもと一緒に季節のかざりもの(こいのぼり、七夕かざり、 クリスマスツリー、おにの面、おひなさまなど)や、遊びの道具を作ってみましょう。

子どもが作ったものは、よく見えるところにかざってあげると喜びます。手作りのおも ちゃで遊ぶ楽しみも、味わわせてあげたいものです。

これらはほんの一例にすぎませんが、子どもが生活の中で実際に体験して学んでいく機会というものは、意識すればいくらでも作ってあげられるものです。親は、子どもと一緒にそれらを体験しながら、新しいことに気づく目を持つこと、自分の知らないことを調べる方法を身につけることを、教えていただきたいと思います。

子どもは、限りない知的好奇心を持っているものです。子どもと一緒に親も学ぶ姿勢を 持ちながら、子どもの知的好奇心を、生活の中での体験学習でどんどんのばしていってあ げて下さい。

- ●生活の中で、子どもが新しいことに目を向ける機会を意識してたくさん作る
- ●親も一緒になって、実際に体験しながら好奇心をのばすような働きかけをする

<育児記録をつけて、学習計画の見直しを>

ご家庭で幼児の知能開発を行うには、学習計画をたてて、それに基づいて系統化された 学習と、生活の中での体験学習とを並行させて行っていくということを、ここまでご説明 してきました。ここで、ご家庭での知能開発をスムーズに続けていくための有効なてだて として、育児記録をつけることについて考えてみたいと思います。

育児記録は、子どもの成長を記録するものとして広く考えて下さい。日記やメモ・表など、自分が書きやすい形で、子どもの成長のいろいろな側面を記録することをおすすめします。「できるようになったこと」「話せるようになったことば」「好きな食べ物」「一日の生活時間」など、子どもの年齢に応じて、その時点の子どもの成長をよく表していることを育児記録として書き残していけばよいのです。

知能開発の実践記録としては、6つの領域ごとの学習した内容(教材名・学習項目・学習量)や生活の中で体験したことを、その時の子どもの様子とあわせて記録していくとよいでしょう。

読み聞かせをした本の名前やよく遊んでいるおもちゃなど、具体的に書いておくことが大切です。子どもの生活習慣や健康状態などについても、あわせて記録しておくとよいでしょう。

育児記録の具体的な例として、わが家の長男の育児記録の一部をご紹介しましょう。

- ○5ヶ月頃:授乳と離乳食を中心とした育児記録
 - 1日の授乳時間・授乳量(飲んだミルクの量)・食べた離乳食の内容・便の回数など (入院中の私にかわり、主人が記録しておいてくれました)
- ○8ヶ月頃:1日の中で印象に残ったことを書いた簡単な日記 言えるようになったことば、できるようになった運動など
- ○1才頃:語彙・遊び・動作・食事・学習・母と子の一日の生活時間など ほぼ1ヶ月ごとに、できるようになったことや好きなことを項目別に箇条書き
- ○3才頃:学習記録

学習内容を、読み聞かせ・歌・漢字カード・数唱・プリント・その他に分けて一週間 単位で記録

○3才頃:読書記録

学習記録とは別に、読み聞かせをした本について、子どもに答えさせながら登場人物 の名前を書き、読み聞かせをした回数などを記録

わが家の育児記録の一部をご覧いただいて、育児記録の具体的なイメージをつかんでいただけたのではないかと思います。これらを参考にしながら、自分が書きたいことを書きたい形式で書かれることをおすすめします。

育児記録をつけるからといって、力む必要はありません。毎日きっちり記録しなければいけないというものではないのです。1週間に一度とか1ヶ月に一度とか、ある程度の期間をおいて定期的に書く機会を作ることができればよいでしょう。

また、育児記録はことばによるものだけでなく、ビデオや写真を含めて考えていただくとよいでしょう。特に、子どもがかいた絵や作った作品などは、実物をずっと残しておくのは大変ですので、ぜひ写真で残してあげていただきたいと思います。写真の横に、子どもが話したことばをそのまま書きとめておくと、とてもすばらしい育児記録になるものです。

このような育児記録をつけることは、子育てを見直すきっかけになります。記録することで、子どもの成長していく姿がよりはっきりと見えてくるのです。そして、毎日の断片的な情報を自分の中で整理してみることで、自分自身に余裕がうまれ、子育てが楽しく感じられるようになるものです。

学習の記録という面においても、子どもがこれだけ学習してきたという実績やできるようになった成果を、客観的に評価する材料になります。記録してみると、必ず子どもをほめる材料が見つかります。さらに、「この子はすごい」と思えるようなことが、いくつか見つかるようになるものです。知能開発を実践している親にとっては、学習記録をつけることは一つの楽しみにもなることでしょう。

学習記録は、現在やっている学習の効果を考え、学習計画を見直すことにも活用できます。

系統的な学習については、学習のペースや進行状況をチェックすることができます。学習記録を見てワークブックの学習がうまく進んでいないように感じる時には、思いきって少しの間その学習を中断してみることも必要です。そのような場合には、図形パズルをするとか、カード遊びをするとか、気分をかえてしばらく別のことをやらせてみて、少したってからワークブックの学習を続けるとよいでしょう。

生活の中での体験学習は、系統的な学習とは別に断片的に行っているものですから、学 習記録の中で、それらをトータルに見直すことはとても大切です。

「こんなことができた」「あんなこともできた」という成果を、系統的な学習と関連づけ

て評価してみましょう。また、系統的な学習ですすめている内容について、生活の中で実際に体験できるように、計画していくことも必要です。

学習記録を見直すと、子どもが今どんなことに興味を持っているかがわかってきます。 ご家庭での知能開発をスムーズに継続して行っていくには、最初にたてた大まかな学習計画を、学習記録を見直しながら、子どもの興味にあわせてより具体的な計画に作りかえていくことが必要になります。

「PLAN(計画する)-DO(実行する)-SEE(見直す)」の3段階の行動によって、ご家庭での知能開発をうまくすすめていただくことを願っております。

- ●育児記録をつけましょう
 - 子どもの成長の様子を具体的に記録する(心身の発達、学習内容など) 自分が書きたい形式で、定期的に記録をする
- ●育児記録をつけると、子どもの成長する姿がはっきり見えて、子育てが楽しくなる
- ●育児記録をもとに、学習計画を見直す 系統的な学習の進行状況をチェック

生活の中での体験学習を、系統的な学習とあわせてトータルにとらえる

ワークブック教材・幼児教室など

ワークブック教材や幼児教室は、家庭での幼児の知能開発を効果的にすすめるためにうまく利用したいものです。体系的に編集されたワークブック教材やそれらを用いている幼児教室を利用して学習をすすめると、学習計画を独力で作らなくても、知能開発に必要な各領域の学習内容にまんべんなく出会う機会を持つことができます。

ワークブック教材での系統的な学習を、子どもの興味を広げていったり、それまで実際 に経験して得た知識を整理する機会として、ご活用いただきたいと思います。

①体系化されたワークブック

系統的に学習をすすめるためには、学習カリキュラムが体系的に編集されたワークブックを選ぶことが大切です。

体系的に編集されたワークブックというのは、単なる入試用の問題集ではなく、幼児期の知能開発に必要な学習内容がすべて盛り込まれているような総合的なワークブックのことです。

入試用の問題集は、「ことば」や「かず」の学習をする教材としては不十分です。入試問題には、子どもが文字や数を知っているということを暗黙の前提としながら、敢えて文字や数字を排除して「ことば」や「かず」のテストをするというような、特殊な問いが多いからです。入試用の問題集を何冊やったところで、その子が何ができるようになったのか、どんな能力が身についたのか、親にはわかりません。さらに重要なのは、子どもにも自分が何をどこまでやったのかわからないという指導になってしまうのです。小学入試に挑戦する人は、(早期教育という観点からはあまりおすすめできませんが)入試用問題集を試されるのもよいでしょう。しかし、受験しない人は、入試用問題集はやらないようがよいとお考え下さい。

体系化されたワークブックを選ぶ場合には、幼児が新しい知識を身につけていくのに必要な繰り返し学習のシステムが、学習カリキュラムで取り入れられているものを選びましょう。

また、解答・解説のページについては、家庭で指導される方のための解説が充実しているものがよいでしょう。

ここで、教育デザイン研究所の幼児用知能開発ワーク「すくすくどんどん」(家庭学習シリーズ)をご紹介しておきましょう。

「すくすくどんどん」は、筆者(松本敏史)が開発した幼児用の体系化された新しいワークブック教材です。これまで全国500以上の幼児教室や幼稚園で、知能開発教材として採用され、高い評価を得てきました。

「すくすくどんどん」には、家庭用の「家庭学習シリーズ」もあります。

「すくすくどんどん」(家庭学習シリーズ)の教材の特長や構成・使い方を具体的に説明 したページおよび、教材の内容の一部をご覧下さい。

~幼児のための知能開発ワーク~「すくすくどんどんについて」

学習カリキュラム表

「すくすくどんどん」(家庭学習シリーズ) 号 p問題/解説

「体系化されたよいワークブック」

- ●幼児期に必要な学習内容がすべて盛り込まれた総合的なワークブック
- ●繰り返し学習のシステムが学習カリキュラムに取り入れられているもの
- ●解説ページが充実しているもの

②幼児教室

幼児教室では、プロの先生が子どもを楽しく学ばせてくれます。幼児の知能開発は、あくまでも親が愛情をもって家庭で行うのが基本ですが、家の近くによい幼児教室があれば、週に $1\sim2$ 回教室に通うことは、子どもにとっても親にとってもよい刺激となるものです。

子どもは、他の子どもと一緒に学ぶ機会を持つことで学ぶ意欲を刺激されますし、親のほうも、同じように知能開発をすすめている他の親とコミュニケーションの場を持つことができます。また、子どもの知能開発に関して幼児教室の先生から具体的なアドバイスを受けられるということも心強いものです。もし、家庭での学習にいきづまりを感じるようでしたら、気分をかえて一度よい幼児教室に通ってみてはどうでしょうか。

ただし、幼児教室だけで子どもの知能開発のすべてができるわけではありません。教室

での学習を補完し発展させていくためには、家庭での学習が不可欠です。よい幼児教室では、宿題という形で必ず家庭での学習を求められますし、幼児教室に通っていても、生活の中での具体的な体験による学習は子どもにとって大切なものです。

家庭での学習活動の一環という位置づけで、幼児教室をうまく利用していくとよいでしょう。

幼児教室は、入試を中心にしたところではなく、知能開発を中心にしたところを選びましょう。そして、宿題など家庭での学習を重視しているところがよいでしょう。そのような幼児教室では、授業で学習した内容や子どもの様子などを、親にしっかりと伝えてくれるので安心できます。

良心的な幼児教室では、入会する前に、体験授業や教室見学を実施しているところが多いようです。教室選びの際は、その教室の雰囲気を子どもと一緒に実際に確かめてみることが大切でしょう。よい幼児教室では、子どもたちが実に楽しそうにいきいきと学んでいるものです。子どもがそのような雰囲気を感じとったら、きっと喜んでその教室に通いたがることでしょう。

「よい幼児教室」

- ●知能開発を中心にしたところ
- ●家庭での学習を重視していて、親への授業連絡があるところ
- ●入会前に、体験授業や教室見学のあるところ
- ●子どもたちが楽しそうにいきいきと学んでいる教室

③通信教育教材

通信教育教材も、本来は家庭での系統的な学習をすすめるためのものですが、非常にい ろいろなものが出回っているので、選ぶ時には十分注意が必要です。

幼児向けの通信教育教材の多くは、ワークブックとCD・カセット・ビデオなどの視聴 覚教材の組み合わせを基本とするもので、絵本・図鑑や、カード・パズル等の教具類が一 緒にセットされているものもあります。

これらの教材は、毎月送られてくる場合と、原則として最初に一括して送られてくる場合があります。

価格の面では、毎月1000円程度のものから教材の総額が数十万円のものまで、さまざまです。

これらの通信教育教材を選ぶ場合には、どんな点に注意したらよいでしょうか。 まず、教材総額が非常に高いもので、教材を部分的に購入できないようなものは、避け た方がよいでしょう。

このような教材には、子どもの能力を総合的に高めるということで数多くの教材がセットされているようですが、実際にそれを使ってみなければ、子どもに合った教材かどうか確かめることはできないものです。教材全体がいくつかに分かれている場合には、そのうちの一部をためしに購入して確かめてみるべきでしょう。

また、セットされている教材の中には、それほど必要でないものも含まれています。中には、市販されている絵本が数十冊含まれていたりするものもあります。価格が数十万円もする総合セット教材というのは、「寄せ集め教材」だと考えてまず間違いはありません。粗大ゴミになる可能性が往々にしてあります。教材は、子どもの興味やレベルにあわせて親が少しずつ選んであげることが基本です。総合セット教材は、早期教育には不要でしょう。できる子どもにとっては一日で飽きてしまい、できない子どもにとっては(今までやったことがないから)全くできない難しいおもしろくない学習になってしまうのです。

反対に、価格があまりにも安いものについては、学習の内容や量が十分であるか検討する必要があります。

先に述べましたように、幼児期の学習には繰り返しが必要ですから、知能開発用の教材にも、繰り返し学習のためのある程度の量が必要になります。低価格の教材には、教材の内容や量がとぼしく十分な学習を期待できないものが多くみられるので、注意が必要です。例えば、「アメリカ」とか「バケツ」とかの点線文字を10個ほどなぞり書きさせて、カリキュラムには「カタカナが書ける」などとなっているような教材が結構多いのです。後にも先にもカタカナを書くという内容はこれだけです。文字を書けるようになるまでには、「鉛筆を持つ」「ぐじゃぐじゃ書きなどの運筆練習をする」「文字を覚える」「なぞり書きをして筆順を覚える」というようなステップが必要であり、それぞれのステップではかなりの練習量が必要なことは言うまでもありません。教材は、学習に必要な内容と量を十分備えているものを選んで下さい。

それから、通信教育で重要なレベルや進度についてですが、「5才児用の9月の教材」というように、その時期の同年令の子どもにはすべて同じ教材を送るようなシステムのところは、よいものとは言えません。

子どもの能力は非常に個人差が大きく、年齢によって学習コースを決めてしまうのはよくありません。学習コースは、能力に応じて選べるべきです。

また、このような教材の場合の学習カリキュラムは、すべて4月スタートの1年コース になっていますが、途中の月から入会した場合には、はじめの部分をとばした状態で同じ 教材を学習することになってしまいます。これでは、学習効果があがりません。

学習進度についても個人差があるわけですから、毎月一定に教材を送るのはよくありません。

その子どものペースで学習をすすめられるようになっていることが大切です。学ぶのが楽しくてどんどん学習する子どもの場合には、教材を先へどんどん進ませてあげることが必要なのです。

通信教育教材を選ぶ際には、価格、教材内容・学習内容、レベル・進度の3点について子どもに合ったものであるかを十分検討することが大切です。学習者(親と子ども)が主導権を持って学習をすすめられるようなシステムになっている通信教育教材なら、合格です。

通信教育教材を選ぶ時の注意

●価格の高いものは、その一部を購入してみて、子どもにあう教材かどうか実際に確認する。 (一部の購入ができないものは、さける)

セットの中に必要でない教材がないか、確かめる

- ●価格の安いものは、学習の内容や繰り返し学習のための学習量が十分であるか検討する。
- ●子どもの能力のレベルや進度にあわせて教材が送られてくるものを選ぶ。

(その時期の同年齢の子どもにはすべて同じ教材を送るシステムは、よくない)

④市販のワークブック

ここでは、書店などで市販されているワークブックをとりあげます。

書店などで市販されているワークブックは、小学入試のための入試用問題集と、「運筆練習」「数のおけいこ」「ひらがなの練習」といった年齢別・学習項目別の問題集とがあります。

これらはいずれも、入試や特定の学習内容しか持たない、断片的なワークブックです。 幼児の知能開発に必要な内容を系統的に学習するには、このようなワークブックは適しません。入試用問題集は、先に述べました通り、文字や数字を排除している点で「ことば」や「かず」の学習が不十分ですし、その他のワークブックに関しては、語彙をふやすとか、常識を豊かにするとか、記憶力を養うといったような幅広い視野から教材作りがなされていないものがほとんどだからです。

知能開発のための系統的な学習は体系化されたワークブックにより行い、その他のワークブックについては、あくまで特定の目的について補助的に利用すべきです。

例えば、入試を受ける場合には、入試問題に慣れるという意味あいで入試用問題集を試 してみることもよいでしょう。また、運筆練習の場合には、市販のワークブックで線がき や数字・ひらがなのなぞり書きなどを順を追ってすすめるのもよいでしょう。

●市販のワークブックは、あくまで特定の目的のために補助的に使うべきである。(系統的な学習をすすめるのには、適さない)

- ●入試を受ける場合、入試問題に慣れるために入試用問題集を使うのもよい。
- ●運筆練習には、「線がき」「数字のなぞり書き」「ひらがなのなぞり書き」用のワークブックを順に使うのもよい。

おもちゃ・知育玩具・知能開発教具

①よいおもちゃを選ぶポイント

「おもちゃ」は、子どもの遊び道具全般を指すことばですが、おもちゃの中でも、知育・ 知能開発を目的にしたものは特に「知育玩具」や「知能開発教具」と呼ばれています。

ここでは、それらを「おもちゃ」ということばでまとめて、ご紹介させていただきます。

子どもにおもちゃを選ぶポイントは、「安全性」「楽しさ」「能力開発」の3点です。

一番基本的なポイントは、子どもにとって「安全なおもちゃ」であることです。特に2 才未満の幼い子どもに与えるおもちゃを選ぶ時には、十分注意が必要です。

幼い子どもはおもちゃを口に入れてしまうことがありますから、口の中にすっぽり入ってしまうような小さなおもちゃはいけません。大きなおもちゃでも、小さな部品がついているようなものは、遊んでいるうちに部品がとれて口に入ることがあるので、注意して下さい。 塗料はなめてもよいものが使われているおもちゃを選びましょう。また、割れやすい材質のおもちゃ (薄いプラスチックなど) はさけて下さい。

おもちゃには安全の目安として、「STマーク」(玩具安全基準合格マーク) がついています。 2 才未満の幼い子どものおもちゃを買う時には、「STマーク」を参考にして選ぶとよいでしょう。

(ただし、子どもが遊んでいる時に、「STマークがついているおもちゃだから安心だ」と 過信してしまうのはよくありません。どんなおもちゃでも、本来の使い方でない使い方を してしまうと、危険がいっぱい起こってくることを忘れてはいけません。幼い子どもは、 親が考えてもみなかった遊び方をすることがあります。子どもがおもちゃで遊んでいる時 には、危なくないかいつも注意してあげて下さい。)

おもちゃ選びで安全性の次に大切なことは、子どもが「楽しめるおもちゃ」であるということです。いくら能力開発ができても子どもが楽しめないおもちゃでは、全く効果がありません。一方子どもが楽しめるよいおもちゃには、能力開発に効果のあるものも多いと言えます。おもちゃの「楽しさ」と「能力開発」には密接な関係があるのです。

子どもが楽しく遊べるおもちゃというものは、基本的にはその子どもの発達段階にあったものです。子どもが今、身につけようとしている能力を使って遊ぶようなおもちゃを与えると、子どもは夢中になって遊ぶものです。(P. の「年齢別学習計画表」には、それぞれの段階にふさわしいおもちゃの種類ものせてありますので、ご覧下さい。)

ひもで引っ張って動かす「プルトーイ」というおもちゃを例に、具体的に考えてみましょう。

はいはいが少しできるようになった子どもには、「プルトーイ」が適しています。最初は、 親が子どもの目の前で、ひもを引っ張りながらプルトーイをゆっくり動かしてやるとよい でしょう。子どもは、はいはいをしながら一生懸命おもちゃを追いかけてきます。 慣れて きたら子どもにひもを持たせて、はいはいしながらおもちゃを引っ張らせてもよいでしょ う。止まって後ろをふりむくと、自分の後ろからおもちゃがついてきているのがわかって、 子どもはとても喜びます。

プルトーイは、子どもにはいはいをすることを動機づけるおもちゃで、プルトーイで楽しく遊びながら、はいはいの能力を育てていくことができます。プルトーイは、はいはいをし始めた子どもにとって、「楽しさ」と「能力開発」を兼ね備えたおもちゃだと言えます。このように、子どもの発達段階にあったおもちゃで遊ぶことは、子どもに「できた」という喜びを与えるものです。子どもの発達段階にあったおもちゃは、ある意味で、「すでにできるようになったことよりも少しだけむずかしい課題を与えるもの」であります。

おもちゃで楽しく遊びながら能力開発を行うためには、それぞれのおもちゃについて、 どんな遊び方をして、どのような能力を養うものかをよく見きわめた上で、子どもにあっ たものを選ぶことが大切です。おもちゃには、目安となる年齢が表示されていることが多 いものですが、子どもの興味や発達の度合いには個人差があることを考えて、その子にあ ったものを選んで下さい。

おもちゃには、1種類の遊び方ではなく異なる何種類かの遊び方があるものがあります。 このようなおもちゃは、子どもにとって「楽しめる」よいおもちゃであると言えるでしょ う。

さきほどのプルトーイの場合は、子どもが発達していく過程において、はいはいをしながら引っ張るというほかに、自分で歩きながら引っ張ることもできますから、よいおもちゃと言えるでしょう。

一つのおもちゃでいろいろな遊び方ができるおもちゃとしては、積み木やぬいぐるみ・・ ブロック・ボールなどがあります。例えば、ひらがなとその文字で始まる絵が書いてある 平たい文字積み木の場合には、積み木を並べたり、積み上げたり、ドミノ倒しをしたり、 絵の面でカルタ遊びをしたり、文字の面でことばを作って遊んだりすることができます。

よいおもちゃは、長い間子どものお気に入りになるものです。お子さんと一緒によいおもちゃをじっくり選んであげて下さい。

- ●子どもにとって安全なおもちゃを選ぶ 2才未満の幼い子どものおもちゃは、「STマーク」を参考にして選ぶ
- ●子どもが楽しめるおもちゃを選ぶ 子どもが今身につけようとしている能力を使って遊ぶおもちゃ (子どもの発達段階

にあったおもちゃ)は、楽しみながら能力開発ができる。

●いろいろな遊び方ができるおもちゃは、長い間子どもが楽しめる。

②知能開発に役立つおもちゃ

ここでは、2才~6才の幼児を対象にした、知能開発に役立つおもちゃの代表的なもの をご紹介しておきましょう。

<積み木>

積み木は大きく分けて、立方体・直方体・円柱などを組み合わせたものと、文字と絵が 書かれている平たい直方体のものとがあります。

材質では、木製のもの、プラスチック製のもののほか、EVA (発泡性ポリウレタン) 製のものがあります。

積み木は、子どもがいろいろな形を認識し、積んだり並べたりして自由に形を作って創造性を育てていくための、知能開発には欠かせない基本的なおもちゃです。数を数えたり、文字で遊んだり、ドミノ倒しといった遊びをすることもできます。

子どもの手になじみ安いように、角が少し丸くなっているものを選んで下さい。木製のものは、木の自然な感触を楽しめますし、プラスチック製のものは、軽くてきれいな色のものが多いようです。EVA製のものは、軽くて弾力性があるので、1才くらいから使うことができます。

「モーリブロック・つみきあそび」

EVA(発泡性ポリウレタン)製のつみきです。赤・青・黄・緑の四色のシートに、円柱・三角柱・直方体などのつみき(いずれも平たいもの)がはめこまれています。

シートからはずしてふつうのつみきのように並べたり重ねたりして遊ぶほか、片付けるときは、もとのようにシートにあう形をはめこむ「図形パズル」にもなります(後の「図形パズル」の項を参照して下さい)。この「つみきあそび」の場合、「片付ける」ということは「指先を器用に動かしながら、色と形を識別してシートにはめこんでいく作業をすること」です。おもちゃを自分で片付けるということも大切な学習です。

安全基準に合格の無公害色素が使用され、軽くて安全な素材ですからSTマークもついています。吸水性がないので、汚れたら水洗いもできますし、お風呂に浮かべて遊ぶこともできます。

積み木というとまず木製のものが考えられるのですが、安全性を第一に考えると、EVA製のものの方が優れていると言えるでしょう。

<フラッシュカード>

「フラッシュカード」は、絵や文字などをかいたカードで、まばたき (フラッシュ) するくらいのごく短い時間にサッサッとカードを見せる方法で学習する教材です。

ものの名前や文字を学習するためのものと、数や数字を学習するためのものがあります。 ことばや数の学習は、実際に物を見たり物にふれたりしながら学習するのが大切ですが、 そのような体験をふまえた上で、フラッシュカードによって反復練習すると非常に効果が あります。また、フラッシュカードでテンポよく刺激を与える学習方法は、集中力や記憶 力をのばし、子どもの脳を活性化するのにも効果があります。

2~3才くらいから、いろいろなフラッシュカードを段階的に学習するとよいでしょう。 1日の学習時間はせいぜい5分くらいまでにして、毎日続けて学習することをおすすめします。

「絵カード」

身近なものの名前とその文字表記を覚えるカードです。B6判で、表面に絵(カラー)と文字(漢字・ひらがな・カタカナのいずれかの表記)、裏面に文字(表面と同じ文字)がかいてあります。30枚が1セットで、「生活・身の回りの物」「乗物・野菜・果物」「動物」の3種類があります。

フラッシュカードとして学習する他、カードを並べて「なぞなぞ」や「仲間集め」など の遊びもできます。

「ひらがなカード」

ひらがなをカタカナを覚えるカードです。表面にひらがな、裏面にカタカナが一文字ず つ書かれています。

「漢字フラッシュカード」

身近なものの漢字表記を覚えるカードです。 B 6 判で、表面に漢字、裏面にひらがながかいてあります。 幼児が日頃身近に具体物として見たりふれたりするものを中心に、 2 0 0 枚がセットされています。

「ドッツカード」

ドッツ(●)で表された数と数字とを学習するカードです。A4判で、表面にドッツ、 裏面に数字がかいてあります。1から20までの20枚セットです。

<ジグソーパズル>

「ジグソーパズル」は、1枚の絵を細かく切り離したピースを組み合わせてもとの絵を 完成させるパズルです。手先を使ってパズルを組み合わせていく作業は、右脳を活性化し、 集中力・直感力・観察力を養うのに効果があります。

ジグソーパズルは、子どもに「できた」という喜びを与えやすい教材です。1才くらい

から、ピース数の少ないもので子どもの気に入った絵柄のものを選んで、始めてみるとよいでしょう。子どもの遊びとしてのジグソーパズルは、絵を一度完成させたら終わりというものではありません。最初は親が手伝って、子どもに完成する楽しさを味わわせてあげて下さい。何回も同じパズルをくりかえして遊んでいるうちに、子どもが一人で完成できるようになります。1つのパズルを自分でできるようになったら、次は少しピース数の多いものに進んで下さい。ピース数が多くなるほど作業する時間は長くなってきますが、子どもはジグソーパズルを楽しみながら、自然に集中力・持続力を高めていくことができます。

「モーリブロック・どうぶつあそび」

EVA(発泡性ポリウレタン)で作られた立体動物パズルです(一般的なジグソーパズルではありません)。9種類の動物を、いくつかのピースを組み合わせて作ります。それぞれの動物ピースは枠にはめこむことができ、枠をジグソーパズルとしてつないでいくこともできます。

子どもが親しみやすい動物のピースを動かしたりはめ込んだりつないだりして、手先を 使って立体感覚を身につけていくことができます。

パズルを完成させる、動物ピースでごっこ遊びをするという基本的な遊び方のほかに、 ねんどの型にしたり、お風呂に浮かべたりすることもできます。

安全基準に合格の無公害色素を使用し、万が一投げたりしても全く安全な素材ですから、 STマークがついています。この素材は吸水性がないので、汚れたりしても水洗いができ ます。

前項で述べました通り、安全性が高いということといろいろな遊び方ができるという点で「よいおもちゃ」と言えるでしょう。

<図形パズル>

ここでは、円・三角形・正方形・長方形などの抽象的な図形を組み合わせて遊ぶおもちゃを、「図形パズル」としてまとめてご紹介します。

図形パズルには大きく分けて、穴にあうように一つの図形をはめこめんで遊ぶものと、 指示された形をいくつかの図形を組み合わせて作って遊ぶものがあります。

穴に一つの図形をはめこむものは、積み木といろいろな形の穴がある入れ物との組み合わせになっていて、木製・プラスチック製・発泡体のものなどがあります。穴の形は、円・三角形・正方形・長方形のほか、台形・ひし形・半円・扇形などよく似た形を含むものもあります。また、積み木のどの面を向けて入れるとよいか、子どもに考えさせるようになっているものもあります。

いくつかの図形を組み合わせて指示された形を作るものは、円・三角形・正方形・長方 形などの図形ピースと、作る形を指示するパターンシートの組み合わせになっています。 材質は、木製・プラスチック製・厚紙製などで、色がついていないもの・単色の色つきの もの・色つきでモザイク模様のものなど、いろいろなものがあります。

図形パズルは、右脳を活性化させ、基本的な図形を認識する力を養い、図形を構成する力をつけるための基本的な教材です。簡単な図形認識からはじめて、少しずつ複雑な図形構成へ段階的に学習をすすめていけるように、いくつかの教材(積み木を含めて考えるとよい)を準備するとよいでしょう。

図形パズルで指示された図形を作れるようになったら、自分で好きな形を作らせてみましょう。抽象的な形からイメージをふくらませる遊びによって、想像力や表現力も高めることができます。

「かたちはかせ」

「かたちはかせ」は、赤・青・黄・緑の4色でできた、円・三角形・正方形・長方形の厚紙製のかたちピースを使って、いろいろな形をつくる図形パズルです。簡単なものから難しいものへ120のパターンシート(かたちカード)があり、段階的に図形に対する認識が深まっていくように構成されている右脳活性化教材です。

2つの正方形で長方形をつくる。2つの正三角形で、ひしがたをつくるといった簡単な ものから、蝉の形をつくるという複雑なものまで、120パターンの形をつくっていく過程で、図形の認識が自然に身につきます。

かたちカードの図形パターンは両面に印刷されており、一面には完成すべき図形の輪郭だけが、もう一面には、輪郭と使用すべきピースや置き方がわかるような補助線がひかれています。年齢の低い子や答えがなかなかわからない場合は、補助線のある面を使用します

かたちピースは2人分ありますから、親子やきょうだいで一緒に楽しめます。

安全であること、色・形を学びながら巧ち性を高めること、年齢に応じた使い方ができること、2人ペアで遊べることなど、「よいおもちゃ」の条件を満たしており、多くの幼児教室でも使用されています。

「木製ユークリッドパズル」

木製の図形パズルで、正方形の箱に大きさの違う直角三角形・正方形・台形(いずれも少し厚みがあるもの)が全部で7つ入っています。

これらを組み合わせて、パターンシートに指示された形を作って遊びます。

<ブロック>

「ブロック」は、基本単位となる小さな部品 (ブロック) を自由に組み合わせていろい ろな形を作って遊ぶおもちゃです。 ブロックだけで組み合わせるもののほか、穴のあいた部品を軸でとめて組み立てるもの もあります。材質は、木製・ポリエチレン・ポリプロピレンなどさまざまです。

ブロックは、作る楽しさと作ったもので遊べる楽しさの両方を兼ね備えているおもちゃです。楽しみながら、手先を使って右脳を活性化させ、思考力・想像力・立体の構成力・表現力を高めることができます。

最初は、親が見本となるようなものを作って見せてあげて下さい。子どもが自分で作り出したら、途中で口出しをせずに、自分で工夫させるようにしましょう。

「カーペンター・ブロック」

ポリエチレン製のブロックです。赤・青・黄・緑・黒・白の6色で、それぞれ6種類の 部品が専用のポリバケツに入っています。

前後・左右・上下につなぐことができますから、自由自在にさまざまなものをつくることができます。小中学生も大人もそれぞれのレベルで一緒に楽しめます。新しく工夫されたもので、これまでの類似のブロックよりも造形力がはるかに豊かになっています。

<カードゲーム・ボードゲーム>

「カードゲーム」は、カルタやトランプのようにカードを使って遊ぶゲームです。

幼児向けのカードゲームとしては、同じ絵柄をあわせて遊ぶ「絵合わせカード」や、「カルタ」があります。

「絵合わせカード」には、同じ絵柄の2枚のカードの位置を記憶して遊ぶ「メモリーゲーム」(トランプの「神経衰弱」と同じ)用のものと、1枚のカードに2つの絵柄がかいてあるものを同じ絵柄が連続するように並べて遊ぶ「ドミノゲーム」用のものがあります。「絵合わせカード」は、2才くらいから遊べます。子どもの手に扱いやすい形・大きさのもので、子どもの気に入った絵柄のものを選ぶとよいでしょう。

「カルタ」は、ひらがなを学習している子どもにぜひやらせたいカードゲームです。よみふだのことばが五七調などのリズムがあるものを選んで、子どもが遊びの中で自然に日本語の美しさを感じとることができるようにしたいものです。内容的には、子どもが興味を持っているジャンルのもので、絵札の文字がわかりやすいものがよいでしょう。

「トランプ」は大人のカードゲームとしてポピュラーなものですが、幼い子どもにとってはトランプ独特の記号が少し分かりにくいかもしれません。20くらいまでの数をしっかりと理解できて、トランプの記号にも慣れたら、「神経衰弱」や「七ならべ」などで遊ぶとよいでしょう。

「ボードゲーム」は、「すごろく」などのように盤を使って遊ぶゲームです。

「すごろく」は、子どもが遊びの中で実際に数を使う体験ができる、知能開発に非常に 効果的なゲームです。すごろくに使うさいころは、ふつうの1から6までの目のもののほ か、数字のもの、0の目のあるものなどを用いてもよいでしょう。また、さいころを2つ ふって「多いほうの目の数」とか「2つの目を合わせた数」というふうにしてもよいでし ょう。

子どもが数を数えやすいようにマス目が大きめのものを選んで下さい。また、ご家庭でマス目を手作りして、シールなどをはって子どもにルール(「2つすすむ」「1回休み」など)を決めさせてあげると喜びます。

「カードゲーム」も「ボードゲーム」も、楽しみながら子どもの思考力や記憶力・集中力をのばすことができます。また、ゲームには守るべきルールがあることを学びます。そしてそのルールの中で競争して喜んだりくやしがったりするということで、ゲームをするということは社会生活のシミュレーションにもなります。

「知能開発教具セット」

この教具セットで、数・量・色・形・文字・数字・ことば・時など、さまざまな基礎概 念を学ぶことができます。

「活用ガイドブック」には、年齢別の指導例が具体的に紹介されていますので、ぜひご 活用下さい。幼児用知能開発ワークブック「すくすくどんどん」と一緒に学習すると、よ り効果的です。 かつてCAIソフトを動かすコンピューターは「ページめくり機」と呼ばれたことがあった。確かに、YES,NO-あるいはリターンキーを押し続ければ終わってしまうようなソフトばかりであった。画面に質問が出る、リターンキーを押す、そうするとそれは間違いだから、もっとよく考えようとか頑張れとか画面の下に表示される。もう一度リターンキーを押すと(つまり2度間違えると)正解が表示される。そしてコンピューターお得意の成績の履歴には0点が入っているという具合である。一般の問題集のページをめくる働きぐらいしか能がないので、そのようなコンピューターを「ページめくり機」と呼んだのである。わざわざコンピューターに入れてするほどのこともないものが多かった。つまり、その存在の必然性がなかったのである。

幼児用の知育コンピューターが何種類か販売されている。ゲーム機メーカーまたは家電メーカーのものが多い。これらの幼児用コンピューターははたして必要なものなのか。必然性があるのか。残念ながら答えはやっぱりノーである。

コンピューターでお絵かきが出来るという。別にコンピューターで敢えてお絵かきをする必要はない。むしろ紙とクレヨン、紙と色鉛筆を使って、お絵かきするほうがよほど知育に役立つのである。知育にキャラクターは必要ない。

ファミコン用の教育ソフトとか知育コンピューターとか、たくさんのニューメディア教育商品が開発されてきたが、結果としてみな不評に終わっている。

新製品開発にはニード理論とシード理論がある。ユーザー(子どもと母親)が何を望んでいるかではなく、新しい技術による製品を出せばよいというシード理論一辺倒でメディア教育商品が開発されてきた。製作側の技術の過信、驕りとも言うべきものがあった。ユーザーの潜在的ニーズがわかっていないばかりか、顕在的ニーズまでもないがしろにされてきたきらいがある。製作側の専門家意識が強すぎた。言い替えれば、固定観念が強すぎた。今までにない技術を持つハードウェアに、子どもが喜びそうなキャラクターが登場するソフトを載せておけば、子どもは満足するに違いないという思い込みがあったとしか理解できない。

筆者は一年足らずの短い期間であったが、東京のゲームソフト企画製作会社の役員をしていたことがある。「スーパーマリオ」だとか「ドラクエII」だとかの超売れ筋ソフトの需要が一巡していたこともあって、「これからは教育用だ、まず幼児教育のソフトだ」という号令が大手ゲームメーカーから発せられていた。ニューヨークのバンクストリート教育大学(大学院大学)で制作中のDVIを見せてもらってから、フルモーション、フルカラーのCDI(コンパクト・ディスク・インタラクティブ)ソフトを作ることができたら、幼児教育に大いに役立つだろうなあという夢を抱いていた筆者にとって、まさに夢が現実になりそうな気運があった。

しかし、いくつかのソフトハウスを訪問し、ソフト製作業界のことがわかるようになってきて、残念ながら今の日本ではいい幼児教育用のソフトは作れないだろうと考えるようになった。

ゲームソフト製作の世界では、堀井 雄二氏など4,5人のヒットメーカーがストーリーを考え、若い人たちが体力と気力でプログラムすることによって「ドラクエ」や「スーパーマリオ」が生まれてきた経緯がある。若い体と若い頭がないとヒットするソフトは作れなかった。

ところが、幼児教育ソフトは若い人には作れないのではないかということがわかってきた。ゲームをしたり、教材で遊ぶ場合、子どもの目がどんな時に輝き、どんな時にくもってしまうのかというような経験知を若い人たちは持ち合わせていないのだ。少なくとも、教育の実践者をソフト開発のプロジェクトチームに入れるべきだ。それも、単に評価してもらうとかモニターしてもらうとかではなく、プロジェクトリーダーとワンペアになるぐらいでないと無理だろう。双方の意見がぶつかって、そこを乗り越えないといい教育ソフトは生まれないだろう。

アメリカで生まれた造語で教育(エデュケイション)と娯楽(エンターテインメント)を合わせた「エデュテインメント」というのがある。確かにアメリカにはエデュテインメントという名にふさわしいソフトも散見される。日本でも最近、この語を使って宣伝されているソフトがあるが、結局エデュケイションにもエンターテインメントにもならない中途半端なものばかりである。むしろ、完璧なエンターテインメントに徹する方が、まだ、エデュケイション効果があるのではないだろうか。

知育コンピュータメーカーや教育ソフトメーカーに「本当に、幼児の教育が大事だから何かしなくては」という大義名分があるのかどうかはなはだ疑わしいのである。

ただ、コンピューターやマルチメディア端末を家庭に入れていきたいという「売らんかな」の経営的モチベーションだけではいい教育ソフト開発は無理だし、結果としてビジネスにもならないのではないか。

経営陣だけでなく、実際に製作に携わる若いメンバーに幼児期の教育がいかに大切なものであるかが心から理解されていないと、インターフェイスの操作性や画面の製作技術向上だけにはまり込んでしまうだろう。

マイ・ファースト・ソニー、サンヨーのロボ・シリーズ、松下のパナキッズ・シリーズ、あるいはセガのピコ、リコーのタッチエース。みんなこのままでは入門マーケット(幼児と母親)を失望させているだけである。学習机にハードやソフトを押し込んで20万円で売っているなどは論外である。多機能机ではなく、不要な物むしろ邪魔な物をくっつけて値段を高くしているだけだ。子どもはすぐに飽きてしまうだろう。

米国のT. I. (テキサス・インスツルメント) 社は以前から数多くの本当に素晴らしい知育玩具(コンピューター) を製作している。ボストンのコンピューターミュージアムで、コンピューターの祖「ENIAC」が展示されているフロアーに、T. I. の「super speak

and spell」が壁にブラ下げられているのに出会った。「こんなのの日本語版があれば本当にいいなあ。」と思ってから、既に8年経っている。独創性はないが、マネの上手な日本のメーカーの人たちに是非、T. I. のマネをしてほしいものである。

①絵本の力

絵本は、子どもの成長を促す大きな力を持っています。

絵本は子どもに、絵本独自の新しい世界を提供してくれます。その世界の中で子どもは 自分の内面に豊かなことばと創造力をはぐくんでいけるのです。

まず、絵本によって、子どもの言語能力を発達させることができます。

親から絵本を繰り返し読み聞かせてもらううちに、子どもは新しいことばを覚えていきます。耳からことばを聞いて、目で絵を確認することで、身の回りにあるものだけでなく、より広い範囲のことばを獲得することができます。また子どもは、絵本の中のリズム感あふれることばが大好きで、まねをして遊びながら、新しいことばを覚えるということもあります。絵本を1つの材料にして、そこから親子の語り合いが始まることもあります。絵本による言語活動が、こうしたさまざまな面で子どもの言語能力の発達を促すわけです。

子どもが絵本を理解する時には、読んでもらって耳から入っていくることば、あるいは 自分で読んだことばを、頭の中で具体的なものに対応させるという主体的な活動を行って います。絵本には絵がありますが、ストーリー全体が絵で表現されているわけではありま せん。ことばという抽象的なものから、自分で想像してイメージを作り上げていくことが 必要になります。

このように絵本によって、子どもの想像力や抽象的な概念を理解する能力をのばすこともできます。

さらに絵本は、子どもが体験する世界を広げ、いろいろな価値判断の基準となる情報を 子どもに与えることもできます。

絵本の中では、子どもが体験したことのないさまざまなできごとがくりひろげられます。 絵本の世界の中で子どもは、それらに喜んだり、驚いたり、悲しんだり、怒ったりという 新しい体験を拡大していくのです。そして自分なりに判断する力を培ってゆきます。

絵本は、このように子どものいろいろな能力を発達させる大きな力を持っています。けれども、ここで注意すべきことがあります。このような能力を身につけさせることが、子どもに絵本を与える目的になってしまってはいけないということです。

「ことばを覚えるために」ということで絵本を読んであげても、子どもは楽しくないのです。楽しくなければ、絵本ぎらいになってしまいかねません。

絵本は、楽しむためのものです。

親子で一緒になって、絵本のすばらしさを存分に味わっていただきたいと思います。絵本を読み聞かせる、子どもが自分で絵本を見る・読むことということを十分楽しむことによって、その結果、子どものいろいろな能力が発達してゆくのです。絵本によって能力を発達させることは、絵本を通じての言語活動の結果であって、目的ではありません。

これは、絵本だけでなく読書全般について言えることです。

幼児期は、子どもが初めて本とのかかわりを持つ大切な時期です。この時期に本(絵本)が好きになった子どもは、その後も自分で読書をすすめていくことができるでしょう。

子どもたちに、絵本とのすてきな出会いの場を作ってあげて下さい。

- ●絵本の力
- 1. 子どもの言語能力を発達させる
- 2. 抽象的なことばから具体的にイメージする想像力をのばす
- 3. 子どもの体験を広げ、判断力を培う
- ●絵本は、楽しむためのもの。絵本を楽しむことによって、絵本の力が発揮される。

②絵本の楽しみ方

絵本を楽しむには、一冊の絵本とのかかわりを深く持つことが大切です。というのは、 子どもが最初から、絵本全体を理解することはむずかしいからです。

読み聞かせて子どもが気に入った絵本は、何度も繰り返し読んであげることが大切です。 最初は、断片的な場面を理解し楽しんでいるだけだったのが、繰り返しお話を読んでもら うことで、最後までお話を聞き、全体のストーリーの展開を理解できるようになってゆき ます。また、読んでもらううちにすっかりお話を覚えて、子どもが自分で絵本を見たり、 読んだりすることにもつながってきます。繰り返し一冊の本とのかかわりを持つことで、 子どもはお話の内容を自分のものとして理解し、自分の中にその本のイメージをふくらま せ、感動を深めてゆくことができます。言語能力は、このように絵本を通じての言語活動 が繰り返し行われる中で高められてゆくのです。

いろいろな絵本を数多く読み聞かせることが目的になってはいけません。一冊の絵本を通して、子どもがどれだけすばらしい感動を体験できるかが大切です。絵本をたくさん知っていても、うわべだけのかかわり合いしか持っていない子どもは、決して本好きにはなりません。

同じ絵本に、時間的な経過をおいてさらにかかわりを持つことも、よいことです。すばらしい絵本というものは、読み手のレベルにあわせて、いろいろな楽しみを与えてくれます。

--わが家の長男の大好きな絵本の一つに、「ざっくり ぶうぶう がたがた ごろろ」(神部淳吉・文/エム ナマエ・絵/偕成社)というのがあります。これは、パワーショベル (ざっくり)・ダンプカー (ぶうぶう)・ブルドーザー (がたがた)・ロードローラー (ごろろ)という4台の働く自動車が、順番に協力して仕事をするお話です。偕成社の「はじめてよむ絵本」というシリーズの1冊で、大きな文字で、ユーモラスな乗り物の絵が鮮烈な色合いで描かれた楽しい絵本です。

のりもの好きの長男が最初にこの本に出会ったのは、2才10ヶ月の時です。大好きな働く自動車が出てくるので、大喜びでした。それまでに、乗り物が主人公になった物語絵本を何冊か読み聞かせていましたが、この本はそれらの中でも特別気に入ったようでした。「ざっくり ぶうぶう がたがた ごろろ」ということばの繰り返しがおもしろいのと、お話が比較的短くて子どもが理解するのにちょうどよかったのがその理由です。何回も読み聞かせを繰り返しているうちに、自分で絵本をめくりながらお話をするようになりました。(この頃には、長男はひらがなをすべて読むことができましたが、覚えたお話を言いながら目で字を追っていたように思います。)

その後も、よく自分でこの絵本を取り出してきては、お話を読んでいます。そのような時には私も一緒に絵本を見たり、かわって読んでやったりするようにしています。幼稚園に通うようになり、お友達との遊びの中で人間関係を深めつつある今、長男は、この絵本の自動車たちから、みんなで協力することの大切さを学んでいるのではないかと思います。同じ絵本を読む場合でも、その子の年齢によって、興味を持つ角度が変わってくるのです。

絵本に、「卒業」なんてありません。読み手が成長して、なつかしい絵本を手にしてみると、それまで気がつかなかった別の視点から新たな楽しみを味わえるものです。子どもが気に入った絵本は、できれば手元において、子どもが望んだ時にいつでも再会させてあげたいものです。

絵本が、すべての年齢の読み手に様々な楽しみを与えてくれるという点において、親も その例外ではありません。子どもだけでなく親も、一緒に絵本を楽しんでいただきたいと 思います。

というのは、子どもに絵本を楽しませるには、親が一緒に絵本を楽しむことが必要であるからです。絵本の読み手である親の気持ちが、聞き手の子どもにも伝わっていきます。 親がつまらないと思って読み聞かせていると、子どもは敏感にそれを感じとってしまいます。

わくわく、どきどき、はらはら・・・親も子どもと一緒になって絵本の世界を楽しみながら、感情をこめて子どもに絵本を読み聞かせてあげて下さい。

「わたしは読むのが下手だから」としりごみすることはありません。おかあさんが読み聞かせの技術にこだわることはないのです。子どもは、おかあさん・おとうさんの声でお話を聞くのが大好きです。親自身が大好きな本を心をこめて読んであげることが、何よりも大切です。

家庭では、おかあさんが子どもに絵本を読んであげることが多いかと思いますが、時に はおとうさんが読んであげることもよいでしょう。おかあさんとは違う読み方を聞く機会 を持つことも、子どもには新鮮で楽しいものです。 子どもの身近な存在であるおかあさん・おとうさんが読書好きであり、絵本を子どもと 一緒になって楽しめるということが、子どもを自然に絵本の世界にひきこんでゆくもので す。

絵本の読み聞かせの時間は、親子のふれあいを楽しむ時間でもあります。子どもがせがんだ時にいつでも絵本を読んであげられれば申し分ありませんが、なかなかそうもいきません。そこで、子どもが寝る前や食事の後など、親も子も比較的ゆったりとした気分ですごせる時間帯を選んで、毎日絵本の読み聞かせをしてあげるようにするとよいでしょう。

読み聞かせをする時に注意すべき点をいくつかあげておきます。

絵本を見る時は、子どもをひざに抱いたり子どもの横に並んだりして、親子が同じ方向 から絵本を見るようにします。

ページをめくるのは、親が文を読み終わった後すぐにではなくて、絵を一緒に楽しんでいる子どもが納得してからにします。子どもにページをめくらせてもよいでしょう。

読み聞かせをしている時の子どもの反応を、大切にしてあげましょう。お話が終わるまで黙らせておく必要はありません。子どもの口から自然に出てきた感想をしっかり受けとめて、相づちをうったりして、子どもをお話の世界にひきつけてゆきましょう。

- ●一冊の絵本と深くかかわりを持つことが大切。
- ●親も一緒に絵本を楽しむ
- ●親子がゆっくりすごせる時間に、絵本の読み聞かせを毎日続ける
- ●読み聞かせをする時は、親子が同じ方向から

子どものペースでページをめくる 子どもの反応を大切にする

③子どもの発達にあった絵本

すばらしい絵本というものは、年齢を問わず楽しむことができるものです。とはいえ、 その時期の子どもの能力の発達にあった理解しやすい絵本というのは、やはりあるもので す。子どもに絵本の楽しさを無理なく感じとらせるには、子どもの発達にあった絵本を、 ある程度段階的に与えていくのがよいでしょう。

ここでは、発達段階ごとにどんな絵本がよいかということをご説明し、適当な絵本の一例をリストアップしておきます。

< 6 ヶ月~ 2 才>

生まれてから6ヶ月くらいたつ頃から、子どもは自分の身の回りにあるものに非常に興味を持ち、ものの名前をはじめとするいろいろなことばを、めまぐるしいスピードで習得してゆきます。絵本の中のものにも興味を持ち始めます。

この時期には、まず、身の回りの品物や食べ物・動物などをわかりやすい絵や写真で表現した絵本がよいでしょう。絵本を見ながら、名前を教えてあげたり、どんな時に使うかなどを簡単に説明してあげて下さい。絵本を見ながら、親が繰り返し語りかけてあげると、子どもが自分でことばを発しながら絵本を楽しむようになってきます。生活の中で実際のものからことばを学習するのと並行して、絵本を通じた語りかけで、子どものことばの世界をより豊かなものにしてあげて下さい。

●乳幼児向きのわかりやすい絵や写真を使った絵本

「家の中のもの」「ようふく」「おもちゃ」「たべもの」「どうぶつ」「のりもの」など

<1才~2才>

1 才をすぎる頃になると、ページをめくると次の場面になるような、簡単な場面展開のある絵本もよいでしょう。この頃には、連続したできごとを理解し、次に何が起こるかをわくわくして待つようになります。お風呂や食事などの身近なできごとや遊びをテーマにした絵本で、ことばがリズミカルなもの、繰り返しのあるものなどがよいでしょう。子どもは、絵本のページをめくりながらお話の中の覚えたことばを言って、自分で絵本を楽しむようになります。

- ●簡単な場面展開がある
- ●身近なできごとや遊びがテーマ
- ●ことばがリズミカル、繰り返しがある

「いない いない ばあ」松谷みよこ/瀬川康夫・絵(童心社) 「あかちゃんとあそぶ絵本」角田 巌/角田昭子・絵(文化出版局) 「あかちゃんのほん(第1集)」まついのりこ(偕成社)など 「おふろでちゃぷちゃぷ」松谷みよこ/岩崎ちひろ・絵(童心社)など --わが家の長男は1才すぎの頃、上述の「いない いない ばあ」の絵本で遊ぶのが大好きでした。ねこ、くま、ねずみ、きつねが次々に「いない いない」といいながら出てきては、次のページで「ばあ」とやってくれるのが、うれしくてたまらない様子でした。ちょうど自分でも「いなーい ばあ」と片言で言えるようになってきていたので、私が読んでやるのと一緒に自分も声を出して遊んでいたようです。

絵本の本文では、「にゃあにゃ」とか「こんこんぎつね」とかいったことばが使われていますが、私は赤ちゃんことばはかえってわかりにくいと思ったので、「ねこさん」「きつねさん」と言い替えて読んでいました。

最後の「のんちゃん」のところをすぎると、

「こんどは、○○○くんが・・」とか「おかあさんが・・」

「いないいないであ」と言って、顔をかくして遊びました。

この段階の絵本は絵本を使って遊ぶことが目的ですから、絵本で遊ぶ側が自分に都合が よいように適当にアレンジして楽しんでもよいのではないかと思います。

先日、この原稿を書くために久しぶりにこの絵本を本棚から取り出してみると、表紙の 内側がとれかけているのに気づいて驚きました。他の絵本にはないほどボロボロになって いて、本当に何回も何回もページをめくって遊んだのが思い起こされました。

子どもの幼い頃の思い出と共にいつまでも大切にしたい絵本です。--

< 2 才~ 6 才>

2 才頃からは、子どもの想像力もかなり発達します。日常生活では、ままごと遊びや乗り物ごっこなどの「ごっこ遊び」が楽しめるようになってきます。絵本も、そろそろ物語性のあるものが理解できるようになります。

最初は、子どもがお話の展開をある程度予測できるように、ストーリーに繰り返しのあるものがよいでしょう。テーマは、やはり生活の中の身近なできごとのものが、子どもが具体的なイメージを持って理解しやすいでしょう。また、子どもは動物や乗り物が大好きですから、それらが出てくるお話も興味を持って楽しみます。子どもの理解しやすい題材を、わかりやすい語り方で伝えてあげることが、子どもにお話の楽しさを味わわせるコツです。

短い物語に慣れてきたら、少しずつ長いものも選んでみましょう。ストーリーも単純なものから、複雑なものも理解できるようになってきます。ただし、このような表現上の難易度の順に絵本を選ぶということに、こだわりすぎないことです。より大切なのは、テーマ選びのほうです。

2 才から 6 才頃までは、子どもの興味の範囲が広がっていく時期です。友達と遊ぶことができるようになり、社会性も発達してきます。また、排泄や食事などの生活習慣を確立し、自立心も育ってきます。

生活の中で子どもが今興味を持っていることや、最近自分でできるようになったことなどがテーマになっている絵本を、タイミングよく子どもに与えることが大切です。子どもは、絵本の中の登場人物になったつもりで、絵本のお話を楽しむことができます。絵本での体験がきっかけになって、実生活で新しいことに挑戦することもあります。子どもの体験の幅を広げて、さまざまな価値観に出会わせる機会として、実生活とうまくつながりを持たせながら、絵本を利用していくべきです。身近なものをテーマにした科学絵本も、よいでしょう。

- ●ストーリーに繰り返しのあるもの
- ●生活の中の身近なできごとがテーマ
- ●動物や乗り物がでてくるもの

「たろうのおでかけ」村山桂子/堀内誠一・絵(福音館書店)

「はらぺこあおむし」エリック・カール/もりひさし・訳(偕成社)

「てぶくろ」うちだりさこ・訳/ラチョフ・絵(福音館書店)

「おおきなかぶ」うちだりさこ・再話/佐藤忠良・絵(福音館書店)

「3びきのくま」トルストイ/バスネツォフ・絵(福音館書店)

「ぼくじてんしゃにのれるんだ」渡辺茂男/大友康夫・絵(あかね書房)

「はじめてのおつかい」筒井順子/林明子・絵(福音館書店)

「ぐりとぐら」なかがわりえこ/おおむらゆりこ・絵(福音館書店)

「だるまちゃんとかみなりちゃん」加古里子(福音館書店)

「とこちゃんはどこ」加古里子(福音館書店)

「しゅっぱつしんこう」山本忠敬(福音館書店)

「ざっくりぶうぶうがたがたごろろ」神部淳吉/エム ナマエ・絵(偕成社)

「わたしとあそんで」マリー・ホール・エッツ/よだじゅんきち・訳(福音館書店) など

--単純なストーリーの繰り返しがこれほど子どもの心をひきつけるものかと、私自身が驚いたのが「てぶくろ」と「たろうのおでかけ」の2冊です。この2冊を読み聞かせたのは、長男が3才になったばかりの頃でした。

「てぶくろ」のほうは、ねずみのかりかりが見つけた手袋の家に、かえるのぴょん・うさぎのはやあし・きつねのつん・おおかみのはいいろ・いのししのおおきば・くまのかみなりが、

「わたしもいれて」と次々にやってくるお話です。

ねずみのかりかりは誰かがやってくるたびに、「あなたはだあれ」「どうぞどうぞ」と同 じパターンの会話を繰り返します。けれども、一見単純な会話の繰り返しの中にも、登場 人物それぞれの持ち味のある口調が取り入れられ、人数がどんどんふえてふくらんでいく 手袋の様子を、「~と~と・・」ということばの積み重ねでうまく表現されています。それ ぞれの動物の名前もユニークで、お話全体が一つの音楽のように心地よく流れていく感じがします。

私がとても気に入って何回も読み聞かせたので、長男も私と全く同じ口調で、お話をするようになりました。

「たろうのおでかけ」は、たろうが動物たちを連れて、仲良しのまみちゃんの家にでかけてゆくお話です。たろうたちはいろいろな所を通ってゆくたびに、「だめ だめ だめ」とまわりの大人から注意されます。みんなはそのたびに「つまらない」と思うのですが、注意を守って歩いていきます。

たろうについてゆく動物たちは、いぬのちろー・ねこのみーや・あひるのがあこ・にわ とりのこっこ。長男は、この親しみやすい動物たちの名前をいち早く覚えていました。

この絵本には、子どもが自分で散歩に出かける楽しさがあふれています。絵本を見ている子どもたちは、自分がたろうになったような気分で、いろいろな場所を通り、ちょっぴりあぶない目に会ってどきどきしながら、交通ルールを理解していることでしょう。「てぶくろ」に比べると少し物語は長くなりますが、繰り返しのパターンが身近なできごとなので、子どもが退屈することはないようです。——

--私が、実生活の体験と関連させた読み聞かせでうまくいったと思うのは、「ぼく じてんしゃに のれるんだ」と「はじめてのおつかい」です。

「ぼく じてんしゃに のれるんだ」は、長男が4才になって、自転車の練習を始めて 少したった頃に読みました。こま (補助輪) つきの子ども用の自転車を、ようやくゆっく りゆっくりこげるようになった長男は、自分と同じように自転車の練習をしているくまた くんの絵本を、夢中になって見ていました。特に、くまたくんのおとうさんが、くまたくんに自転車の乗り方を教えているところは、真剣に聞いていたようです。

長男が自転車の練習をする時に、私がくまたくんのおとうさんのように、

「とまりたいときは、ブレーキをぐい一っとにぎる。きゅっとにぎるとがくんととまるからね。さあ、やってごらん。」

と言うと、にっこり笑って返事をしました。くまたくんに刺激されながら、長男は自転車 にのるのがめきめき上手になりました。今では、わが家の近くの坂道も平気でペダルをぐ いぐいこいで、自転車で走り回っています。

私はこの絵本で、くまたくんが自転車を買ってもらった最初の夜、寝る前にそおっと自転車を見にいって「おやすみ」というところが大好きです。

長男が自転車の補助輪をはずす時には、この絵本をもう一度読み聞かせるつもりです。

「はじめての おつかい」は、長男が4才半ぐらいの時に初めて読んだ絵本です。その

時から、私も子どもも、表紙のみいちゃんの笑顔のファンになってしまいました。各場面の絵がとってもすばらしく、ページをめくるたびにどんどんどんどんとんいないちゃんにすいこまれていくような感じがします。この絵の迫力のおかげで、絵本を見ている者がみいちゃんになりきって、お話を楽しむことができるように思います。

私はそのとき長男に、

「○○○くんも、ひとりでおつかいにいってみる?」

と聞いてみましたが、すぐに「いや」という答えがかえってきました。

そして最近、何を読もうかと絵本をさがしているうちに大好きなこの本を見つけ、また読んでみることにしたのです。初めて読んだ頃から、もう1年くらいたっていました。長男の行動半径も広くなってきたし、おみせやさんごっこなどの遊びで買い物に対する興味も高まってきているようなので、「もしかすると・・・」という期待を持って、私は読み聞かせを始めたわけです。長男は、以前よりも真剣にお話を聞いているように見えました。

何日か読み聞かせを繰り返したある日、空き箱に折り紙をはって工作をしていた長男が、 「折り紙がなくなった。」

と言い出しました。

「折り紙は、文房具屋さんに売ってるよ。自分で買いに行ってきたら。」 と何気なく私が言ってみると、長男はすぐにとてもうれしそうな顔をして、

「うん。」

と返事をしたのです。

長男が出かけた後、親の私の方がドキドキして待っていると、長男は手にしっかりと折り紙を持って、あのみいちゃんと同じくらいすてきな笑顔で帰ってきました。

私たち親子にとって、「おつかい」というできごとがこんなに感動深いものになったのも、 あの絵本に出会ったからだという気がします。 ——

<4才~6才>

4才から5才頃になると、未知のものに対する好奇心が旺盛になり、非現実的なものごともある程度想像できるようになってきます。絵本についても、生活に身近なものだけでなく、昔話や童話などの非現実的な空想の世界の物語を楽しめるようになります。

また、他人の気持ちを理解するなど、感情面でもかなり発達してくるので、子どもの感動を呼ぶような心情的な物語もよいでしょう。

- ●非現実的な空想の世界の物語
- ●心情的な物語

「おたまじゃくしの101ちゃん」加古里子(偕成社)

「11ぴきのねことぶた」馬場のぼる(こぐま社)

「ずーっと ずっと だいすきだよ」ハンス・ウィルヘルム/久山太市・訳 (評論

社)

「こぎつねコンとこだぬきポン」松野正子/二俣英五郎・絵(童心社) 「ちいさいおうち」バートン/石井桃子・訳(岩波書店) 「ふたりはともだち」アーノルド・ローベル/三木卓・訳(文化出版局) 「てぶくろをかいに」新見南吉/若山憲・絵(ポプラ社)

昔話「ももたろう」「うらしまたろう」「さるかに合戦」「かさじぞう」 「はなさかじいさん」「おむすびころりん」

童話「シンデレラ」「ジャックとまめのき」「赤ずきん」など

-- 「ずーっと ずっと だいすきだよ」は、主人公の男の子と一緒に大きくなってきた 犬のエルフィーが、年老いて死んでゆくお話です。男の子は、年をとってだんだん動けな くなってゆくエルフィーのことを心配し、やさしく世話をしながら毎晩、

「ずーっと ずっと だいすきだよ」

とエルフィーに言ってやります。ある夜エルフィーは、男の子のベッドの横で、静かに死 んでいきます。

私はこれまで、幼い子どもに死を説明するのは残酷だし、子どもには死の意味を理解するのがむずかしいだろうと思っていましたが、この絵本の紹介を他の本で見て、子どもに与えてみることしました。

わが家のすぐ近くには、祖父母も住んでいます。長男は、祖父母とエルフィーを重ね合わせながら、自分なりに、年をとるということ、そして死ぬことの意味を理解したのではないかと思います。

外国の絵本ならではの詩的な世界の広がりが感じられて、私にはとても印象深い絵本です。

④よい絵本を選ぶコツ

ご紹介した絵本リストは、絵本を選ぶ時の一つの目安にすぎません。ここで取り上げた 絵本が、読者にはお気に召さない場合もあるでしょう。また、これら以外にもよい絵本は、 たくさんあると思います。

お子さんに与える絵本は、絵本を読んであげるおかあさんやおとうさんが、実際に絵本を手にしながら選ばれるのがよいでしょう。発達段階にあわせてどのような絵本がふさわしいかは、先にご紹介したとおりですが、たくさんある絵本の中から「よい」本を選ぶコツを、ここで考えてみましょう。

「よい」絵本というのは、子どもが(親もですが)十分に楽しめる絵本です。どんな絵本が楽しめる絵本かということは、たくさん絵本に出会うほどわかってくるものです。絵本を書店で「買う」ということになれば、やはり絵本の数は限られてしまいますので、図書館などをうまく利用して、実物の絵本にたくさん目を通す機会を作ることが大切です。

いろいろな種類のブックリスト(「○○が選んだおすすめ絵本」の類のもの)を参考にされることもよいでしょう。複数のブックリストに出ているような絵本なら、安心できます。また、絵本の内容を紹介したブックリストだけでなく、幼稚園・保育園の先生や母親などが、読み聞かせをした時の子どもの反応を一緒に紹介した「絵本ガイド」を合わせて利用されるとよいでしょう。子どもがどんなふうにその絵本を楽しんでいるか、生の情報が得られます。

絵本の裏表紙に印刷されている「厚生省中央児童福祉審議会推薦図書」や「日本図書館協会選定」などのタイトルも一つの目安になります。何もないものより、たくさんタイトルのついているもののほうが、よい絵本が多いものです。

時代をこえて読みつがれている「ロングセラー」にも、よい絵本がたくさんあります。 初版年から二十年以上たっているようなものであれば、一応「ロングセラー」といえます。 「ロングセラー」は、長い間子どもたちの支持を得て存続している、人気の高い絵本です。

昔話や名作童話と言われるものを選ぶには、注意が必要です。分厚い本にたくさんのお話が入っているようなものは、よくありません。そのような本の場合たいていは、お話が短すぎてさし絵もまばらです。これでは、子どもが具体的なイメージをもって理解することができません。

お話1つで独立した1冊の絵本になっているものを選んで下さい。いろいろな場面の絵を見てページをめくりながら、子どもはイメージ豊かに理解できるようになるのです。

(子ども向けのダイジェストでは、名作童話の原作のよさを味わうことができません。

子どもが成長したら、原作を忠実に翻訳した完訳本を読む機会を作って、ぜひ本物の楽し さにふれさせてあげていただきたいと思います。)

図書館や書店で絵本を手にしたら、できるだけ実際に絵本を読み通して見て下さい。時間がない場合には、書き出しの部分を $1\sim2$ ページ読んでみるだけでも、かなり感じがつかめます。

絵についても、文と同様に一通り見て下さい。文を読まずに絵だけを見ていって、全体のストーリーがわかるような絵本は、よい絵本です。

読んでみて気に入った絵本については、同じ作者・画家のものを続けて読んでみるのも よいでしょう。

- ●図書館などを利用して、多くの絵本に出会って選択眼を養う
- ●複数のブックリストに出ている絵本を選ぶ
- ●子どもの生の声が出ている絵本ガイドを参考にする
- ●「○○推薦」「○○選定」などのタイトルがついている絵本を選ぶ
- ●初版年から二十年以上たっている「ロングセラー」を選ぶ
- ●昔話や名作童話は、お話1つで1冊の絵本になっているものを選ぶ
- ●実際に、絵本全体(または書き出し1~2ページ)を読んでみる
- ●文を読まずに絵だけを見て、全体のストーリーがわかる絵本を選ぶ
- ●気に入った作者・画家の別の絵本を選ぶ

図鑑や事典は、生活の中で子どもの興味をのばしていくために、ぜひとも家庭に備えて おきたい教材です。

図鑑については、幼児向けの知識絵本とはまた別に、小学生以上を対象としたシリーズの動物・植物・昆虫・魚貝の図鑑を一冊ずつ揃えておくとよいでしょう。事典については、小学生くらいを対象とした子ども用の百科事典的なもの(「21世紀こども百科」-小学館-など)や、小学校低学年の生活科用のものなどがあるとよいでしょう。

図鑑や事典は、子どもが自分でも取り出しやすいところに置いて、日頃から親が子ども と一緒に調べる機会を多く作るようにして下さい。

例えば、散歩に出かけて草花や昆虫を見つけた時には、「あれは何という名前の花かな」と図鑑で一緒に調べてあげることが大切です。名前がわかっているものをさがす時には、後ろの索引を使ってのっているページをさがすことも、子どもに教えてあげて下さい。名前だけでなく生き物の生活の様子や、生活上のものごとについて調べたい時には、事典を使うとよいでしょう。

子どもが生活の中で感じたちょっとした疑問や興味などを、図鑑や事典を使って、うまく 発展させてあげて下さい。

図鑑や事典のきれいな写真や絵は、子どもの知的好奇心を刺激するものです。親と一緒に図鑑や事典に親しむ機会を持った子どもは、自分ひとりでも図鑑や事典のページをめくって楽しむことができます。文字が読めるようになったら、自分で索引をひいて調べることもできるでしょう。

図鑑や事典を広げてみると、親にとっても興味深いことがたくさん見つかるものです。 私は、いろいろな種類のせみの大きさや、せみがおなかをふるわせて鳴くことを、子ども と一緒に事典を調べていて初めて知りました。どうぞ皆様もお子さんと一緒に、知らなか ったことを自分で調べてわかる楽しさを体験してみて下さい。

- ●小学生以上を対象とした動物・植物・昆虫・魚介の図鑑を揃える。
- ●子ども用の百科事典的なものや小学校低学年の生活科事典などもあるとよい。
- ●図鑑や事典は、子どもが取り出しやすいところにおいておく。
- ●親が一緒になって、図鑑や事典で調べる機会を多く作る。

①視聴覚教材での学習の特徴

テレビやビデオ・CD・カセットなどの視聴覚教材による学習は、子どもが実生活ではなかなか体験できないようなことを疑似体験(シミュレーション)できるということが大きな特徴です。

もう番組はなくなってしまいましたが、フジTV系列で長い間続いていた「ひらけポンキッキ」では、ガチャピンが陸海空のあらゆる場所に出かけていって様々なことにチャレンジしていました。ダイビング、スキー、ハングライダー、サンドバギーなど様々なスポーツに挑戦するガチャピンの姿を、子どもたちはワクワク、ドキドキしながら見つめていたに違いありません。ガチャピンはスポーツ以外にも、海外の動物園や水族館に行ったり、清掃車の後ろに乗ってゴミの回収をして焼却場まで持っていたり、本当にいろいろなことをやっていました。時には、様々なモノを作っているところに出かけていって、それらのモノ(例えば「バネ」や「太陽電池」)が製造される原理や過程を、子どもたちにわかりやすく説明していました。また、消防署や警察署、農村にも一日出かけていって、社会というものはいろいろな人たちが様々な仕事をすることにより成り立っているということを教えてもくれました。テレビの前の子どもたちは、きっとこのガチャピンを通して自分が体験したような気分になって、いろいろなことを理解していったのではないかと思います。

それから、例えば幼児にアリ・家・町・日本・地球の大きさを相対的に理解させる場合なども、視聴覚教材によるシミュレーションしか方法はないと思います。「ひらけポンキッキ」では、AV機能を十分に駆使したソフトによって、実に短時間にわかりやすく子どもにこれらの大きさを示していました。

このように、視聴覚教材の疑似体験機能というものは、先のガチャピンのような現実の世界の映像をテレビ等を通して間接的に体験することのほかに、コンピューター・グラフィックスの技術を生かして、起こりうる現象を疑似的に映像上で作り上げてわかりやすく示すということも含んでいます。いろいろと言葉を駆使して説明してもなかなか理解できないことが、具体的な変化の映像を見せることで直観的にたやすく理解できてしまうということも多々あるものです。

この視聴覚教材の疑似体験機能を生かして、幼児用にいろいろなの分野の教材が作られていますので大まかにご紹介しておきましょう。

1つめは歌や音楽を楽しむもので、テレビ番組・ビデオ・CD・カセットなどいろいろなメディアのものがあります。子どもに豊かな音楽環境を与えるために活用して下さい。

2つめはアニメーションや人形劇の類のテレビ番組やビデオです。絵本に比べるとやや 娯楽性が高いものが多いと言えますが、お話を具体的なイメージつきで楽しむことができ ます。 3つめは、図形・数量・ことばなどの学習用のテレビ番組やビデオです。ビジュアル化された映像と早いテンポで楽しく学習をすすめることができます。

4つめは、工作や料理などの作り方を解説したテレビ番組です。子ども向きに手順をわかりやすく見せてくれ、ものを作ることに対する興味を育てていけます。

5つめは自然や社会に関するテレビ番組やビデオです。ふだんはなかなか見られない生き物の生態や社会の様子を、子どもにわかりやすいようにじっくり見せてくれます。

②視聴覚教材を利用する際に大切な心構え

テレビやビデオ・CD・カセットなどの視聴覚教材は、ある意味で非常に手軽に利用できるものだと言えます。例えば家事で忙しい時に、子どもにお気に入りのビデオを見せておけば、難なく時間は過ぎていくものです。けれども、視聴覚教材を活用して教育効果をあげるためには、この安易性には注意しなければいけません。テレビに子守りをさせておいて、子どもの能力がのびるはずがありません。教育というものには、やはりもっと親の愛情が必要なのです。

視聴覚教材は、親が子どもと一緒になって楽しむことが基本です。

テレビやビデオからの映像は、子どもが実際に体験することと違って断片的なものであることがほとんどです。それを疑似体験として認識するには、見たものを正しく位置づけることが不可欠になります。小さなアオムシのようすがよくわかるように大写しになった映像だけを見た子どもは、アオムシを巨大な怪獣のように理解するかもしれないのです。その時親が「あんなに大きく見えているけれど、アオムシってほんとはこれくらいの大きさしかないんだよ。」と、指で具体的に大きさを示してやれば、子どもはテレビで見た映像を正しく認識できるわけです。

親が一緒に視聴覚教材を楽しむようにすれば、テレビで見たことは疑似体験ではあっても親子共通の体験になります。実際に体験できないような様々なものごとについて、親子で一緒に話し合うきっかけが生まれます。このことは、親子のコミュニケーションにおいてとても大切なことだと思います。そして、ややもすれば受動的で終わってしまいがちな視聴覚教材による学習を、親子での話し合いを通して能動的、主体的な活動に発展させていくこともできるわけです。

視聴覚教材を利用する時間のすべてについて親が一緒にというわけにはいかないでしょうが、できるだけ親が一緒に楽しんでやるように心がけて下さい。

③テレビ・ビデオ・CDおよびカセットの利用の仕方と教材の選び方 <テレビ>

テレビは、見る側が主体性を持って利用することが大切です。長時間テレビをつけっぱなしにしていたり、テレビを見ながら食事をするなどというのはいけません。子どもにテ

レビと上手につきあわせるには、親が中心となって、幼いうちから一定のルールを持って テレビに接するよう習慣づけることが大切です。幼児の場合、テレビをみるのはせいぜい 1日1時間くらいが適当です。見る番組をあらかじめ子どもと決めておくとよいでしょう。 また、子どもがテレビを見る位置にも注意して、目を悪くしないよう気をつけてあげて下 さい。

教育という面では、子どもが見るテレビ番組はNHKだけで十分だと思います。「おかあさんといっしょ」のように、子どもが歌や軽い体操で体を動かしながら楽しめる幼児番組もありますし、「チロリン村物語」や「ポコニャン」などのアニメもあります。NHKのアニメは、ストーリーや登場人物の言葉使いに節度が感じられるので、一応安心して子どもに見せることができるでしょう。新しくなった子ども向け料理番組「ひとりでできるもん」では、料理の作り方以外に、「天恋界101伝説」というテレビゲーム形式の知能開発クイズもやっていて、非常におもしろいと思います。「ともだちいっぱい」には、身近な生き物を紹介する「しぜんとあそぼ」のほか、「つくってあそぼ」「うたってあそぼ」のコーナーもあります。クラシック音楽をコンピューター・グラフィックスの美しく斬新な映像とともに楽しめる「音楽ファンタジー・ゆめ」も見逃せません。このほか、子どもに標準的な正しい日本語にふれさせる機会として、ニュースや天気予報もおすすめします。特に天気予報は、全国の天気で必ず日本列島の地図が出てきて、主要な地名や自分の住んでいる県や都市の位置づけがわかるようになります。さらに週間天気予報では、一週間の曜日の移り変わりもわかるようになり、また「最高気温」などの漢字も自然に覚えてしまいます。

<ビデオ>

ビデオの利点は、テレビと違って自分の好きな時間に同じものを何回でも繰り返して見る子とができるということです。それゆえ、繰り返し学習が必要とされる幼児の知能開発教材として、ビデオは適したものであると言うことができるでしょう。

例えば、実際に何度か見たことのある「カマキリ」について、ビデオでその生態を教えてもらったり、また、ビデオではじめて見た「カマキリのタマゴ」を実際に庭で発見したりというように、子どもの成長の過程で、実体験と疑似体験を繰り返すことが可能なものとして、ビデオは大いに役立ちます。

気に入ったテレビ番組は、家庭でビデオに録画して活用するとよいでしょう。

市販されているビデオ教材では、特に図鑑ものをおすすめします。「ドラえもんいきもの 大探検」「ドラえもん昆虫図鑑/魚介図鑑/植物図鑑」(すべて小学館)や動物・乗り物な どの図鑑ビデオは、子どもも大人も楽しめます。

そのほかでは、テレビ番組「ひらけポンキッキ」の遺産とも言うべき「ひらけポンキッキ・教育ビデオ ことばとかず/ひろがるせかい」がおもしろいでしょう。

<CD・カセット>

CDには、絵も出せる、いわゆるAV(オーディオ・ビジュアル)ソフトも少しは出てきていますが、幼児教育用としてはまだないに等しいと言えます。また、マルチメディアソフトとして、CDによる対話型ソフト(CDI)も実用化されつつあり、幼児教育ソフトも作られていく予定ですが、これもまだ評価できるほどのものはありません。ハードウェア製作技術にソフト企画製作技術がついていっていない状況です。現在のところ、CDは音楽用が中心ですので、ここではCDとカセットの音楽教材をとりあげることにします。

CDやカセットを利用すると、子どもに豊かな音楽環境を提供することができます。童謡などの歌はことばの学習という面で、またクラシック音楽は右脳を活性化させるという面で、それぞれ効果的であると言われています。ただし、音程のしっかりしていない子どもの歌っている童謡は、いい音を聞かせるという点では不適当です。私は、純粋に音を「楽しめる」ということが音楽のすばらしさではないかと考えています。

音感の発達する幼児期に、よい音楽にふれさせる機会を持つことは大切です。できれば 胎児の頃から(外界の音が聞こえるようになるのは妊娠7ヶ月頃だと言われています)、母 親とともにクラシック音楽に親しめるとよいでしょう。特にバロックはそのリズムが人の 鼓動にフィットしており、心が安らかになごむといいます。モーツァルトも人気がありま す。近頃、母と子のためのクラシック名曲集とか赤ちゃんのためのピアノ曲集など企画も ののCDソフトが数多く出ています。その中からおかあさんが好きなものを選んで、子ど もと一緒に聞くのがよいでしょう。

CDやカセットを通して、いろいろな楽器の音に興味を持たせることも必要です。「ピーターとおおかみ」は登場人物がそれぞれ別の楽器で表現されて、音楽でお話が展開していく音楽物語です。子ども用の解説がついたソフトで一度聞いてみることをおすすめします。

前述の教材・教具の選び方・使い方には、幼児の英語教材については省略しています。 幼児の英語教材について述べるためには、別の本を書かなくては足りないほどです。そ こで、他の幼児用教材とは区別して、英語のみについてかいつまんでまとめてみます。

まず、英語なのか、英会話なのか?英単語を覚えたらいいのか、日常会話ができたらいいのか、あるいは中学英語につながるような英語を学ぶのか?アルファベットを書かせるのか?

何をどこまでやるのかが、教材によって様々に異なります。教材には本、オーディオカセット、CD、ビデオ、レーザーディスク、磁気カードなど多様な種類があり百花りょう乱の趣きを呈しています。

ことばの学習ですから、「読み、書き、聞き、話す」がバランスしていなければなりませんが、特に幼児期は「聞き、話す」が中心になります。全く知らないことばを聞いて、まねをして話す能力は、大人よりも幼児の方がすぐれていることからしても当然、「聞き、話す」の分野に重点が置かれます。英語の「読み、書き」は幼児には難しい。英語の「読み」=読解力、「書き」=作文力は、その人の持っている国語力によって決まると言っても過言ではありません。入試の英作文などはまず和文和訳をしてから、英訳するというテクニックが必要とされるほどです。

それゆえ、幼児の英語教材の全どが「聞き、話す」を中心にしてプログラムされています。

確かに、外国語の学習を通して知能開発を行う方法があります。ところが、現在日本にある幼児用の英語教材は、何らかの形で英語(の一部)自体を学ばせることを目的としており、英語という外国語を通して幼児の知能を開発することを目的とはしていないようです。そこで、英語教材について敢えて結論だけを述べるとすれば、「幼児の知能開発のために英語を学習せねばならないという必然性はない。むしろ、早期にできうる限りの日本語の学習をするほうがよい。」ということになります。英語に関しては、広い意味で、日本語の一部になっているカタカナ語(外来語)の語いを豊富にすることだけで十分ではないでしょうか。

よく、これからの国際社会で生きていくためには、英語が必要で、特に幼児期から勉強しないとリスニングやスピーキングが英語を母国語とする人のようにはならないと宣伝されます。「聞き、話す」能力を身につけるのは大人よりも幼児の方が優れていますから、この宣伝に一理はありますが、市販の英語教材を使うだけでは、母国語として聞いたり話したりするレベルにはなりません。「ハロウとかアイムファインサンキュアンジュ?」程度は一日で覚えてしまうでしょう。でも、それだけのことです。

英語を母国語とする人としばらく一緒に生活する(できれば英語を母国語とする国に移り住んで)などしないと、教材を与えるだけでは無理です。

また、国際社会で生きていくために必ずしも英語が必要だとは言えないし、よしんば必要だとして、幼児期からその学習を始めないといけないということもないでしょう。米国の元国務長官のキッシンジャー博士のあのひどいドイツ訛りの英語は有名です。日本でいえば、あの英語で外務大臣という要職を務められたのです。私自身もスタディ・トリップで3回米国に行っていますが、つけ焼き刃で中学英語(これも悪名高くて、"Are you a girl?"というような女性にひっぱたかれそうな文法英語から未だに脱してはいないのですが)を復習するだけで、各地の研究者と交流することはできました。

幼児期にはまず、正しい母国語の学習が第1です。また、教材を与えるだけではバイリンガルやトリリンガルにはなれません。勿論、たまたま子どもが英語に興味をもって、テープやCDを聞いたり、ビデオを見るのを楽しんでいるのであれば、興味の続く限り環境作りをしてあげればよいと思います。また、アルファベットに興味を持って、文字の読みを知りたがったら「ABCの本」を買ってあげればよいでしょう。しかし繰り返しになりますが、英語を幼児期に学習しないといけないということはないのです。

なお、とにかく、英語に興味を持たせたいと思われる方に。2才ぐらいまでの幼児でしたら、マザーグースなどのナーサリーライムズを就寝時に聞かせてあげるなど耳からの刺激のほうが良いでしょう。3才ぐらいからの幼児におすすめするのはNHKの「英語で遊ぼう」です。進行役が日本人のおねえさんであった前シリーズは、失礼ながら、あまりにもマンガ的で、今一つの番組でしたが、現在のセカンド・シリーズになってから見違えるように面白いプログラムになりました。主人公の"マリーお嬢さま"はたぶん米国人でしょうか、若いチャーミングな女の子です。この人は、本当に表情豊かな人で音声だけでなく体全体で英語(文化)を表現しています。お話の舞台は、"マリーお嬢さま"と"ベルナール"という大きな犬が運営するホテル"ギャラクシー"。毎回、こどもにもわかる面白いオチのあるショートストーリーが展開され、その中でキーセンテンスを学びます。

他に英語の歌や、歌に合わせた踊りや体操があり、昔話のコーナーもある幼児向け英語 バラエティになっています。英語に興味をもたせるきっかけを与えるための"教材"とす ればこの番組だけで十分ではないかと思います。

『子どもを伸ばす愛情教育』改訂版

著作:松本敏史(教育デザイン研究所)

編集:茶屋萬衛門

大阪府南河内郡千早赤阪村小吹68-115

0721-70-5080

制作日 2014年9月24日

本書の無断複写・複製・転載を禁じます。